

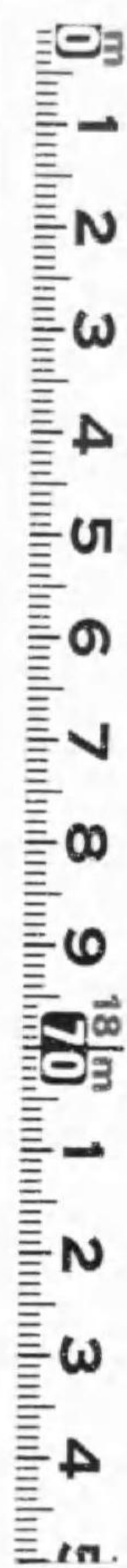
遺族讀本



特 216

695

京都市刊
第三輯



始



持216
695



昭和十八年出版

楠一族

鷺尾雨工

京都市版



目次

阿久の方	一
縁談	一
妻の道	七
一旦緩急	一三
建武中興	一九
千早城	一九
鳳籠還御	二三
足利叛く	二四
正成出陣	二六
正行の成長	二六

上京	三一
門出	三五
櫻井驛	三九
湊川の最期	四六
説得	四六
七生報國	四九
遺訓	五五
ふたりの生還者	五五
竹童丸の死	五六
正成之首	六〇
遺兒たち	六七
四條噺	七五

此の一篇を
御遺族の
皆様に捧ぐ

京都市

楠一族

鷲尾雨工

阿久の方

縁談

(その一)

金剛山の西の麓には、いくつかの小盆地があつた。
谷の小川ゆるやかに流れ、鬱蒼と茂る喬木林を背負ひ、丘陵をめぐらす壺中の別天地のごとき、これら静寂な小盆地の一つに、甘南備の里があり、この里の土豪に、南江といふ郷士が、累代の大地主として住んでゐた。矢佐利といふ字に住居があつたので、南江屋敷は、また矢佐利屋敷と呼ばれた。阿久が生まれたのは、この矢佐利屋敷だつた。兩親の南江正守夫妻は、阿久がまだ頑是ない頃、病死して、父母の慈愛に恵まれることは厚くなかつたが、兄の朝忠は親代りとして、ねんごろな養育をこたへた。

阿久は、聡かつた。そして鄙には稀な美少女だつた。しかしその美しさには、いささかも嬌めいた

ところがなく、河内の田舎武士の家庭には、まことに適はしく鄙びて、清楚で、上品ではあつても、雅やか過ぎず、女一通りの教養のほかに、武藝をも習得してゐた。小太刀も薙刀もてきた。馬にも乗れた。

だが、さうした嗜みのある阿久は、なにが一番の趣味かと人に訊かれると、すこしの衞ひもなく、天真らんまん、極めて素直に、答へた。

「あの、趣味と申しましても——わたくしは、蠶を飼ふのが、なにより好きなのでございます」

明朗で、しかもつつましましやかな心ばへと共に、阿久の容貌は、だんだん人目をひく美しさをも加へて、妙齡十七の年が暮れ、また新春を、一つ迎へたのであつた。

年の始めの祝ひ酒は、若侍の心をなにか浮々と躍らせる。質實剛健を旨とする南河内武士といへども、青春の者が酔へば、つい年頃の女子の噂に、雑談の花が咲く。

「どうぢや！ 聞いたか？」

「何を？」

「御許は、まだ知らんのか？」

「何やら、さつぱり話がわからん。一體、何がどうしたのぢや？」

「じつはな、ふと聞きこんだには聞きこんだが、どうも信じられない話でな。水分館の殿が、南江の阿久なら、わしの嫁に貰つてもよいと、仰せられたさうぢや」

「嘘をつけ！」

「松尾の刑部殿に、さう仰つたといふのだ」

「擔ぐのは罷めてくれ。考へてもみる。館の殿は、今年二十八歳をお迎へになるまで、未だお獨身でいらつしやる。本来ならば、七年前に大殿が御他界あそばされたのだから、御婚姻をおいそぎになるのが當然ではないか。それを、一向に娶らうともなされず。そもそもあの御聰明さからいつても、大殿の御生前に——すなはち兵衛さまにしてみれば、二十歳前後に、奥様をお持ちになつてしかるべきだつた」

「理屈をいつても、始まらぬわ」

「どうも信じられぬな。京都でも、館の殿の御學問は、ずゐぶん名高いといふ。楠兵衛の宋學は、一世の大儒、玄惠法印に學んで堂に入り、出籠の譽れがあると大層な評判で、あれなら殿上人の姫君とも、御縁談がまともならうなどといふ噂さへ、俺はこの耳で聞いてゐる」

「お前の耳で聞いたのは、噂だ！ おれの話は眞實だ」

「いくらお前が力んでも駄目だ。よくよく胸に手を置いて考へてもみる。館の殿は、毎年京都暮しを相当長く續けてゐらつしやるお方だ。いかに阿久が美しくとも、所詮は、山間の野花。都の花園に、絢爛を競つてあてやかに咲く名花とは、やはり比較にならぬからのう」

「うん。さういへばさうだが——」

「第一、御身分が釣り合はない」

「さうだ。阿久どのは、やはり野におけ、れんげ草ぢや」

たしかに、いい加減な噂で、いづれ立消えと思ひのほか。
門松も除れぬ松の内であつた。

「今日は、非常に愉快な、そして有難い話を持参致した。これ、朝忠どの！」
松尾刑部季綱が、甘南備の矢佐利屋敷を、おとづれたのである。

「ほう、松の内から、なにを持ちこんで来た？」

日頃から最も親しい交際の南江朝忠は、気軽に微笑して、迎へ入れた。

(その二)

「どうぢや、驚いたか？」

「む。それではいよいよ正成の殿も、御嫁様をお貰ひあそばす氣になられたか。それはおめでたい。」

「いや、めでたいのは殿ばかりではない。おぬしの方が、ずつとめでたい。」

「なんと？」

「いや、實はな。去年の暮も、押し迫つたある日ぢや。殿は、わしにかうお訊ねになつた。矢佐利屋敷の阿久は、なにを好むかのう？ とな。そこでわしは、薙刀をつかふのが、阿久どのの随一の嗜み——」

「おぬし。さう御返辭申し上げたのか？」

「とは申しあげなかつた。蠶を飼ひますが、なによりも楽しさうに見えます。さうお答へをした。さうするとぢや——」

「おゝ？」

「正成の殿は——さやうか。む、さもあらうと思つた。楠兵衛の妻は、蠶を飼ふことを好むやうな女子でなければならん。阿久を、嫁に貰ひ受けたい。その方、この由を南江に申入れてはくれぬか、と仰せられた。どうぢや、じつに有難いお言葉——拙者は頭がさがつた！ 涙がこぼれた！」

「松尾！」

とただ一聲。朝忠は、ぐつと咽がつかへた。

しかし——。

（お断りせねばならない。殿の仰せは忝けない！ だからといって、お言葉に甘えて、では差上げます、などと云へるか？ 云つてはならぬことだ！）

分を守ることが、人の道であると考へた朝忠は、

「まことに御勿體ない御沙汰ながら、拙者ごとき者の妹が、なんとして館のお方様になることが出来るやう？ 罰があたる。平にお断り申しあげて下され」

松尾にも、その氣持はよくわかつた。着實な人生を歩んで来た南河内武士の心は、まさにさうなくてはならなかつた。だがそれはそれ、殿の御心は、またおのづからその上にあつた。

朝忠にしてみれば、正成の殿は又と得難い人傑であり、遠からず天下に名をなすお方であると思ひてゐた。そのやうな立派な方に、妹は不似合であると思ひたい。いや、さう思ふのが、武士の心であり、身の程を知ることが世の義理であらねばならない。

(その三)

「わたくしのやうな、足らはぬ不束者を……………」
と阿久が云つた。

「む、そなたも、さう思ふであらう」

朝忠は、妹の、羞かしさうな顔の、ほつと泛んだ櫻色を眺めた。

ややしばらくの間、高鳴る胸の鼓動を、押し鎮めかねてゐた阿久ではあつたが、やがて答へた言葉は、意外。

「わたくしは、ただ忝けない氣持で……………館さまのお言葉に、兄上さへ御異存ないならば、思召しのままに従ふつもりでございます」

「え、慮外だツ！身の程を知れ！」

兄は、叱りつけた。聲も荒い。

けれども、阿久は、しとやかに、

「身のほどは、よく存じてをります。でも、館さまは、野良の仕事や蠶を養ふ百姓の營みを、身ぢかに見てをる女子を——と思召すのでございませう。それが、河内の國のためになるといふ、深い御思慮からと存じます」

と答へた。

「だまれ！不躰な！」

朝忠の顔が、本意なげに脹れた。

妻の道

(その一)

松尾刑部は、しばし手を拱ぬいた。昨日の今日、ふたたび南江を訪れたのであるが、朝忠は頑強に、御辭退しつづけた。

いくらいひ諍つても、詰まるところは理屈ではない。朝忠の感情が、納得し、承諾しないのである。

松尾は、又も手を焼いて引きあげた。

だが、正成は、

「刑部、もう一度出向いてくれ。それで埒があかば、わしみづから出向いて、直接に懇望いたさう」と、云つた。

次の日、松尾は三度目の交渉に出掛けたが、やはり空戻りであつた。

「とても拙者では見込なしと、諦めて立歸りました」

「ずいぶん足勞を煩らはして、濟まなかつた。最初から、わしが行けばよかつたかも知れぬ」

正成は、水分の館から馬で、矢佐利屋敷へ出掛けた。

朝忠も、主君に面と向つては、嘔鳴るわけにもゆかず、黙つて聞いてゐるうちに、正成が、言ひ結んだ。

「わしの娶るべき女子は、廣い世の中と申せど、阿久をおいて他にないと信じる。よつて所望いたすのぢや」

不思議にも朝忠は、我知らず引込まれて、斷らうにも斷れないやうな氣持になつてくるのだつた。何か日に見えぬ力に、ぐいぐいと引つけられてゆくやうだ。

「館！ それほどまでに仰せ下されまするならば………」

つい、さういはずにはゐられなくなつた。朝忠は、半ば無意識のうちに、かしこまつて頭をさげてゐた。

(その二)

ほのかに匂ふ山櫻が、東條の谷々を、白く埋める彌生の初旬に、ごく質素な婚禮の儀式が挙げられたのである。

その前の月、すなはち二月二十三日に、元應の年號が、元亨と改まつて、

今上の聖天子(後醍醐天皇)御位に即かせ給うてより、第四年日の春、まさに玲瓏。下萬民のひとしく、拜ろがみ讃へ奉る、美しの春であつた。

「おめでたい春に、おれたちの地頭さまは、御婚禮をなされた」

「うれしい事ぢやな。他所は知らぬが、この南河内は、食べものに不足はなし、絹布もあまるほど蓄へてあるし、用水池の水はまんまんとしてゐるし、生活になんの不安もない樂天地だのう。この上の悦びとしては、一日も早く御館さまに、お世嗣のお生れなさることぢやが………」

「さうだ！ ほんにめでたい春だなあ」

楠の領民どもは、皆こぞつて、地頭館の彌榮を、壽き慶ぶ。

だが、水分の館では。

世の常の新婚生活とは、ずゐぶん異つた、嚴肅な、しかも意義深い、新夫婦の愛情が結ばれた。

「さて阿久。そなたにすこし訊ねたいが、いまの世を、どう思ふ？」

正成は、やさしい光を双眸にたたへて、しづかに質ねた。

新夫人は、伏せた視線をあげると、

「世の有様など、なにもぞんじませぬわたくしでございます。ただ御位におはします大君におかせられて、申すも恐れおほいことながら、徽聖文武にわたらせられ、かたじけないほど御聰明であらせられますことを、かねがね兄より、うけたまはつてをるのみで、ございます」

と、答へた。

「うむ、よろしい」

満足げに、正成は領きを見せて、

「それひとつ。その一事を、しかと存じてをれば結構ぢや。——天つ日嗣の高玉座に、今上陛下のごとき聖天子を仰ぎたてまつれば、かうした河内の、邊鄙な、山峽の一小臣にすぎぬ正成でさへ、ほんとうの生甲斐をおぼえて、身内の血がたぎるやうぢや」と、云つたが、

「もう一つ訊かう」

で、新夫人は頭をさげた。

「大君のおんために、この正成が、一命を捨てた場合——そなたは歎くか？」
ぎくツと、胸のまん中を衝かれて、

「……………」

「どうぢや、悲しむか？」

阿久は、面をあげて答へた。

「不覺の涙は溢すかも、わかりませぬ。けれど、大君のおんため、み國のためならば、討死をあそばしたと聞いても、歎いたり、悲しんだりは、いたさぬ覺悟でございます！」

「む、それでこそ！」

正成の顔は、はればれとあかるかつた。

「その覺悟あつてこそ、わしの妻として、誤ちなく、すごして行けるだらう」

さういつて、若妻の可憐な顔ばせに、にこやかな瞳を投げかけたのである。心足りたよろこびの色が、双頬に、ほのぼのと、ただよつてゐた。

(その三)

「男子の忠義は、これを一言にいへば、一死報國ぢや」

正成は、ことばを繼いだ。

「すめら御國に生を享けた者の、臣の臣たる道は、國家の非常時に男は敢然と死をえらぶこと、そして、女は、その死を歎かぬこと、それが第一義ぢや。男子のつとめと女子のつとめ。そして、男子の忠と、女子の忠——精神は同じでも、形はおのづから異なる。ここに日本人の使命があるのぢや。このことを、恒に、はつきりと腦裡に刻みつけて、おかねばならぬぞよ」

「はい！」

阿久が額づく。

「一天萬乗の君の聖恩は、廣大無限ぢや。高く廣くかぎりなき君の御鴻恩に對して、いかに報い奉るべきか、臣の臣たる節を、誤らざらんがために、正成は、學をまなんだ。そなたも知つてをるであらうが、倅ひに菩提寺、觀心寺の御坊に學ぶことが出来たし、さらに京都の、獨清軒の法印を、宋學の師とたのむことが叶つた。法印殿は、畏くも主上に御進講仕へまつるお方。帝皇の師傳であらせられるお方を、わが師にいただいて學び得た正成は、仕合せ者ぢや」

正成は、端然と坐したまま、微動だにしなかつた。

「この仕合せ、自分の仕合せに對して、正成は、學び得た學問を、まことの道のための實踐に、かならず移すべきことを、われとわが心に、固く誓つてゐる。——わかるな。しからば、實踐とは？」

さう云つて、新妻の眸を、ちつと見詰めた。

「阿久、答へてみい」

「お學びあそばされた學問を、實踐に移すことを誓つてゐると、さう仰有つた意味を、おたづねなの

でございませうか？」

「む、さうぢや。解るかな？」

「はい、どうやら」

「申してみよ」

「忠義のために死ぬこと。——ちがひまするか？」

「いや、その通りぢや」

正成は、頷いて、

「阿久。あの山の名を、いや、山の名の由来を、存じてをるか？」

指したかなたに、庭樹の梢ごしに、金剛山の倨然たる姿が、くつきりと見えてゐた。

「——金剛山の由来でござりまするか」

「いや。山を初めて開いた役の行者の話なら、むろん知つてゐようが。わしのいふのは、山の名の出所、いひかへれば、金剛不壊といふ言葉の持つ意味だ」

「ぞんじませぬ。どうぞ、お聴かせ下さいませ」

「絶対に堅くて、いやしくも壊れたり、割れたり、破れたりしない。それが金剛不壊だ。佛教でいふ七寶の、随一は金剛石ぢや。その金剛石のやうに堅牢無比、不壊不滅だといふあの山の名。わしは、實に素晴らしい名だと考へてゐる。大君のため、忠義のために死ぬといふ精神を、あくまで徹底させれば、それは一死によつて不壊不滅にもなりうる。それは死である、しかも——。永久不滅の死であ

る。なによりも高く尊いのは、じつにこの金剛精神だと、わしは考へてゐる」

「はい。ありがたうございました。さう訓へて頂ければ、わたくしみたいな者にも、お心持ちはよくわかるやうな氣が、いたします」

阿久は、はるか高い所まで高められたといふ感じに打たれて、身の緊張まるのをおぼえずには、おられなかつた。

人間の命の、なんと尊いことであらうか。人間の精神の、なんと偉大なことであらうか。自分までが、不滅なもの、永遠なものに觸れることが出来さうにさへ思へた。

名山金剛山は、大空の悠久な色を背景として、巍峨蟠然と、その偉容を横たへてゐる。

——ちいつと、眺める。

阿久の眼が、潤んで来る。

それは、昂められた女の涙であつたらう。

一 旦 緩 急

(その一)

すでに金剛精神の眞髓に觸れて、國家一旦緩急の秋に處すべき心構へは、はやくも出来た新夫人であつたが、さうした覺悟が、實際に役立つ時は、果していつくることであらうか。南河内の邑々は、山野の幸を満喫して、いはば平和境であつた。

しかし、百姓たちは、常日頃から楠のをしへによつて、

「いつなん時、凶作年がめぐつてくるかわからない。また、世の中は泰平のやうでも、いかなる機ツかけから、亂れないものでもない。水分館からいつも、戦と饑饉の用心だけは怠るなと、仰せ出されてゐるが、ほんに平常の心懸が第一ぢや」

と、云ひ合つてゐた。

日常生活を出来るだけ切詰めて、貯蓄々々と心がけた。

正成はつねに、勤勉節約をすすめて領民を富ませ、富ませることによつて自己の武力を充實させ、いざといふ重大事變が起り、ひとたび非常時に際會したならば、ただちに起つて君國の急に赴く準備を、してゐたのであつた。

そして、阿久の方も妻として、夫の簡素な生活にふさはしく、治にみて亂を忘れぬ、甲斐々々しい生活を送つてゐたのである。禊がけて、養蠶にいそしむ。時としては、夜を徹することも、珍らしくはなかつた。

一年、二年と歳月が流れて、元亨三年。

阿久は、二十歳で、初産をした。産まれたのは男兒であつた。

「若さま御出生！」

水分館の内外に、歡びのどよめきが湧き起つた。

御結婚式の時は、徹頭徹尾つましやかであつたが、今度は、御初兒の御誕生ぢや、御祝儀酒ぐら

ゐ、出はしないかなと、若い家來の中には、半ば期待してゐる者もないではない。

さうした家來たちの心を察したのでもあらう、正成は、長男誕生の七夜には、領内の郎黨一同へ、もれなく祝酒を配らせた。

祝の宴も張られた。

母阿久の方に似て、色白な、愛らしい顔立ちをしてゐる嬰兒をみて、さすがに正成は、愉しさうであつた。

(どうか、この父の精神を享けついでくれ)

心でさう念じながら、正成は、自分の幼名をそのまま、この嬰兒に、多聞丸といふ名をつけた。

(その二)

正中の變が起つたのは、みどりご多聞丸が、愛らしい體をつくつて、わらひをほころばせる頃であつた。

かねてひそかに、日野俊基朝臣と語りあつて、その日の來るのを待つてゐた正成であつたが、極秘な筈のその計畫が、六波羅へ洩れたために、事は未然のうちに芽をつまれてしまつた。同志の公家、武家たちが、北條氏のために一網打盡にあげられた。

(惜しいことをした！この上は、迂濶に都へ出たら、六波羅の眼が光らう)

ちつと、京都の空を見詰めて、正成の心は暗然としてゐた。

二男が生れ、三男が生れて、阿久は、二十五歳で、三人の男兒の母となつた。

長男の多聞丸が後の正行、この時、六歳になつてゐた。次男の次郎丸が、後の正時。三番目の虎夜叉が、正儀となつて、後に楠氏の三代目を継ぐことになる。

(その三)

それから、さらに三年。

元弘元年の八月である——

主上御側近の藤房卿、季房卿を中心とする、北條氏討伐の御密議が、いつか嗅ぎ出されたらしく、六波羅探題が、にはかに兵を都へ集め出した。

陛下には、ひそかに禁裏御所を出てさせたまひ、笠置山に御動座あらせられた。

畏くも主上が、南木の靈夢を見そなはしたのは、この時であつた。

正成が、一介の地方武弁にすぎぬ身で、お召しの光榮になつたのも、またこの時であつた。

「たとへ戦ひ敗れましても、正成一人なほ生きてありと聞召さば、御心安らけく、聖運かならず開くべしと思召せ！」

双の瞳に、ぎら／＼と泪の露が宿つて、流れおちる。正成は、感泣したのである。

お答へ申しあげると、すぐ河内へ馳せ戻り、すぐさま赤坂城を築きあげた。俄普請ではあつたが、ここに菊水の旗は、翩翩とひるがへつたのである。

「阿久。そもじは三人の子供をつれて、菩提寺に潜んでくれ。戦は、この後何年つづくやら知れぬ。大君のため、君國のために、わしは大軍をひきうけて立つのぢや。されば、そもじも、忠やかに。三

人の子の養育を頼むぞ。體を達者に強健に育ててくれ。さらばぢや！」

「はい。およばずながら、精かぎり！」

けなげにも、答へた言葉は、短くとも、大義のために、決然と孤壘に立ち上つた夫正成に、うしろを顧みさせぬだけの、女の意氣と念力が、溢るるほどにも、充ち籠つてゐた。

阿久は、三人の子供を連れて、觀心寺の中院に引移つた。

それからの日々が、どのやうなものであつたかは、想像にあまるものがある。

(その四)

「火事だツ！ 火事だツ！」

と叫ぶ聲。つづいて、

「あツ！ お城の方角に凄い火が、もの凄い火が見えまするぞツ！」

と、寺僧の一人が走りこみながら、喚いた。

赤坂の城は、大火に包まれてゐた。それがこの觀心寺からも、手にとるやうに、ありありと眺められた。

城の焼あとからは、千四五百の白骨が現れたといふ。當然、正成の死が豫想された。

「ねえ、お父様は、どうなすつたのでせう？」

多聞丸の聲が、ふるへてゐた。

掻き亂されるやうな胸騒ぎ、グサツ、と心臓に突き刺さつたやうな衝戟。しかし——

阿久は、突嗟に、夫に向つて誓つた言葉が、脳裡に閃いた。

「やがて、わかりませう。決してお案じてはない。戦といふものは、一度や二度は、敗けても平氣ぢや。終局の大勝利を占めることが大事なのだ、かねがねお父様は、仰せられました。母のいふことが、わかりますか？」

多聞丸は、眸をこらしたまま、頷いた。

「お父様は、この先、何年も山の奥や、谷の蔭に、おひそみになつて、天子様のおんために、艱難辛苦をおしのぎなされ、きつと二度目のお旗上げをなさるに違ひありません。多聞どのは、お父さまのお在り所が知れなくとも、くよくよせずに、淋しがつたり悲しんだりせずに、ひたすら學問を修め、武道を上げみなされ。弟たちへのよきお手となることが、そのままお父さまへの孝行です。父上に孝をつくせば、やがては、それが、大君への御忠義にもなるのです！」

それから一年あまりの間、三兒を抱へて刻苦する阿久の忍耐は、續くのであつた。

建武中興

千早城

(その一)

(何といつても田舎武士、楠だ。やれ英雄だなどとさわいても、所詮、蒼海の一粟ぢや。たわいななもの、赤坂城の灰となつたわい。)

赤坂城を乗取つた湯淺定佛は、嬉しくてたまらなかつた。すぐ城の改築にかかつた。

ちやうど、その城が出来あがつた頃、どこにひそんでゐたか、菊水の旗が忽焉とあがつて、アツ！といふ間に、城はふたたび正成に占領された。

正成はすぐ、金剛山の天險に、千早の城を築きはじめた。年があけて、元弘三年である。

築城は成つた。にはかに、正成は、出陣命令を出した。

「阿久。わしの思案は、いかにせば敵の大軍を、おもふ存分に金剛山の麓に、東條谷に、ひきよせ得るかといふことであつた。楠の城めがけて、攻めよせてくる敵の兵力が、大きければ大きいほど、わしの本懐なのだ！」

正成は、深く息を吸ひ込んで、語を繼いだ。

「天下の朝敵が、こぞつて群り来て、圍んでくれさへすれば、正成の目的、正成の志は、達せられるのぢや！ その招鳥！ 今日の出陣は、その囚に出るのぢや！ はッはッはッ………」

(その二)

正成の計畫は、美事に成功して、賊軍は雲霞のごとく、千早城めざして迫つて来た。しかし。

千早城は難攻不落であつた。

だが——。大塔宮の立籠つてゐらせられた吉野は、陥落して、宮様には、高野山へ御避難あらせられた。

(おのれ、吉野を侵したる賊徒ばらめ、いさ来い。目にものみせてくれる！)

ふかい愁傷の心の底から、朝敵を、勦滅せずんばやまぬ軒昂たる意氣が、ぐんぐんと盛りあがつて来た。

寄手の敵軍は目を追つて数をます。まづ高橋軍、隅田軍が六波羅から派遣されて来たが、たちまち正成の奇謀にかかつて、見苦しい惨敗を喫した。

續いて關東の剛將、宇都宮が出向いて来たが、わづか六七日て退陣を餘儀なくされた。その間。

金剛山にひるがへる菊水の旗は、ひとり金剛山にのみ孤立してゐたのではない。それはいかに國

々の、尊皇精神を鼓舞したことであらうか。

北條氏の大軍を、腹背側の三方にささへて、孤城無援の寡兵。月を重ねても屈しない、その威容、忠烈が、まづ赤松圓心を、播磨に崛起させた。閏二月である。

つづいて伊豫の土居通益、得能通綱の義兵が四國に動き、また同時に、九州でも大宮司惟直、原田種昭が、勤皇の旗を擧げた。

隱岐の島にあらせられた主上が、島を脱け出させて給うたのも、閏二月の二十三日であつた。まさに、義軍奮起の時である。

(その三)

赤坂の城は、ふたたび陥落した。もとより、一時しのぎの城であつてみれば、陥落は當然のことである。

しかし、將兵は齒がみをして、男泣きに泣いた。

「泣くな、歎くな。あれ程までに敢闘、よく敵に數十倍の損害をあたへたれば、みぢん申分のない働きてはないか。守兵は、派遣所よりすべて、この詰城千早に引上げるべき時である。ここ詰城の城頭に、楠の旗立ちなびくかぎり、幕府の運命は、崩壊への一途を辿つてゆくにちがひないのだ」

正成の言葉。それは、まことに不壞の氣魄から迸り出る言葉だつた。

なんたる力強い訓示だつたらう。兵の啜泣はなほ斷續してゐたが——もはや滴る泪は、無念の泪や自責の泪ではなかつた。高められ

た精神の、潔らかな、感奮の泪であつた。

正成の、いとも嚴かな双眸にも、一滴の熱い涙が――

鳳 輦 還 御

(その一)

北條氏の下についてゐた、源氏の嫡流、足利高氏が、蹶起した。

五月七日の朝、卯の刻。足利軍は、嵯峨から内野までひし／＼と押し寄せて、六波羅を總攻撃。六波羅軍は總崩れであつた。時は同じ。

これも源氏の正流、新田義貞は、生品明神の祠前で旗上げをした。五月八日の卯の刻である。

義貞を總司令官とする官軍は、鎌倉へ、鎌倉へ――。稻村ヶ崎を通つて、一氣に由比ヶ濱から鎌倉府内へ侵入した。

もうかうなつては、萬事休す、である。鎌倉府内は火の海と化した。

遂に。

高時は、一族と共に割腹した。

元弘三年五月二十二日、北條氏は逆賊の汚名を千載に擔つて滅びたのであつた。

(その二)

その翌日。

伯耆の國、船上山の御行在所から、玉輦が、京都へ還幸の御途にのぼらせられた。

丁度、玉輦が、兵庫の福嚴寺へ着御あらせられた時、幕府倒壊の大吉報が、義貞から注進された。

何たる佳き日であらう。

兵庫御發輦は六月の二日。まさに御鹵簿が進まうとした時である。

「楠 正成拜趨――」

おお！ 金剛千早の孤壘を死守して、幕軍數十萬を支へとほした殊勳者正成が、参向したのである。

主上には、御簾をたく捲かしめ給ひ、近く正成を召され、

「大義早速の功、ひとへに汝の忠戦にあり」

かたじけなくも仰せ下されたのである。

地に、ひれ伏して正成は唯感涙にむせんだ。あまりにも優渥な御誼である。

身にあまる光榮の勿體なさに、しばらくは勅答の言葉が、喉に問へた。

だが、やがて奏した。

「大君の聖文淑武の御徳によらずんば、微臣いかでか尺寸の謀を以て、敵の圍みを出づること叶ひませうや。楠の如きは、ただわづかに臣道を踐みましたるに過ぎませぬ」

どこまでも功を辭し、勳を謙下する正成であつた。

兵庫より都まで十八里の間、楠が御先驅をつとめ、畿内の兵七千を指揮して供奉の先頭に立つた。

まこと、五雲しづやかなる御幸である。

大塔宮護良親王をはじめ奉り、玉葉の宮方、顯樞の高僧たちが、おん出迎へ申上げたことはいふまでもない。

六月六日、東寺より二條の内裏まで、御還幸あらせ給うた。

日本の國の維新、後醍醐天皇の建武中興の御大業は、かうして成つたのであつた。

足利 叛 ぐ

(その一)

年があけて、建武元年と改元された。

討幕維新の戦功に對する行賞の御沙汰も済んだ。

足利高氏は、おそれ多くも、御諱尊治の御一字を賜はり、尊氏とあらためて、武藏の國司に任せられ、從三位に叙せられたのみならず、武藏、常陸、下總の三箇國の守護職に補せられた。そして、弟

の足利直義も、遠江國守護職を賜はつた。楠正成は、攝津、河内、和泉三箇國の守護職を賜はつた。

それにとりもなつて、さまざまの制度が設けられ、新官廳が整備した。

蕭々と維新の御鴻謨はその緒につき、天皇御親しく大政をみそなはせ給うたのである。御親政の前

途は光明赫耀として、仰ぎ望まれた——。

——が併し。

憎むべきは足利兄弟である。その野心である。野望である。

思へば、おそれおほくも護良親王の令旨といひ、新田一族の壯舉といひ、このふたつながら、尊氏

の幕府再建の基礎づくりに利用されたといふことも出来る。

幕府再建の畫策！

申すも畏れおほいことながら、大塔宮は、尊氏の讒によつて、鎌倉へ御配流の御身とならせられた。

痛ましい哉、建武御親政の礎はこの一事のために、早くも大龜裂を生じた。

(その二)

護良親王の薨去は、申すに忍びない。

尊氏が、京都から關東に下つて、愈々叛逆をあらはしたのは、建武二年十月のことである。

朝廷は、ただちに新田義貞を討伐軍として東下せしめた。しかし惜しむらくは、官軍利なし。兵力

強大なる賊軍は、京都に占據をつけた。

年が替つて、官軍が大勝利を得た。京都を奪回。尊氏は、辛くも船で海上に遁れたのである。

正成出陣

正行の成長

(その一)

「若様。この邊でひと休み致しませうか」

「む、すこし草臥れた。だが、左近爺は達者だね」

「なにしろ、御父君正成の殿が、ちやうど若様ぐらゐの時から、お側に仕へて、鍛へあげた躰でございますから、まつ、手足には筋鐵が入つてをります。はッはッはッ」

楠家の譜代、恩地左近満一は、正行とともに、池の汀の嫩草の上に、腰をおろした。

正成から委囑されて、恩地左近は、若き正行の教育に、全力を傾倒してゐるのだつた。

水分の屋敷には、夫人阿久の方が、次男の次郎丸と三男の虎夜叉といふ、まだいたいな二少年の

養育を、涙ぐましい努力で、自分の務にしてゐたし、上赤坂の本城には、長男の正行が、もはや母夫

人の膝下を去つて、傳育者左近と共に在城してゐたから、正成としては、なにも格別に、後顧の憂ひ

なく、ひたすら京都の警備に専念してゐた。

今日は、左近の指導によつて、この池ノ平へ實地踏査に來たのだつた。

「御覽なされませ」

と、左近の指さす方に、あまたの馬が、若草を喰んでゐた。

「若様。放し飼ひにしてあるあの馬どもも、やがては軍馬としてお役に立つのでござります」

「ああ、さうだねえ」

池の水面には、金剛山の峻嶮が、さかしまに映じてゐた。乳藍色の春の空が、白い斷れ雲を、ふは

ふはと泛べつつ、映つてゐた。

池をめぐる高原は、千早城背後の山上にある盆地だつた。

「若様。あそこに並んで見えるでせう？ あの廠舎には、いろんな糧秣がいつばいてござりますよ」

「ああ、あれ？ 兵糧を入れる廠舎？」

「左様でござります」

「なぜこんな場所へ拵へたのかしら？」

「御尤なお訊ねです。じつは、爺は、それを説明致すために申したのでござる——さきほど若様も御覽なされた笹尾の寨、細尾の寨、大澤の寨、あの三寨はいづれも、紀州ならびに大和路に通ずる秘密の間道を扼するものでござりますが、紀州、大和の方はみなお味方。それ故、兵糧や軍需品を、搬んでまゐることが敢て難事ではござりませぬ。で、御本城が正面から大敵をうけても、必要な糧秣は、この池ノ平に蓄積のある限り、自由に、御本城へ搬入することができます。」

左近は、熱心に説いてきかせるのであつた。

「さうだなあ！」

正行は頷いて、

「千早城は狭いし、赤坂の本城までおろしてしまへば、こんどは麓からお山の頂へんまで擔ぎあげなくてはならぬし。——爺殿、よくわかりました」

左近は、周章てて手を振った。

「あ、不可ませぬ。殿などと、そんな御丁寧に仰有つては、左近が恐れ入ります。爺と、呼び棄てて頂きます」

「だけど、左近爺はお師匠だもの」

「それは、年の功で、御教育はつかまつる。お教へは致しますが、爺めは若様の御家來。若様は、爺めの御主君でいらせらる」

「お許は家來でも、正行からいへば、お師匠ぢや。師匠に對しては、禮儀を正せと、父上がいつも仰せられる」

「いや、この爺は師匠ではござりませぬぞ。ただ、正成館の御命令によつて、若様御補導の役目を、相勤めるのみでござる」

誠實律義な恩地左近は、どこまでも嚴格に主従の筋目を、明澄にするのだつた。

日ましに正行は成長して行つた。父の血筋と、母の薰育とをうけて、利發に、素直に、すくすくと育つて行く——。

(その二)

「若様、ここてござりますよ」

と、左近が云つた。

やはり供一人つれぬ兩人づれ。池ノ平から、金剛山の山嶺まで、のほりつめてゐた。

金剛山轉法輪寺の本堂の前に立つて、禮拜をすまずと、正行が、

「大塔宮さまは、御座をここにお置き遊ばしたの？」

と、訊き直した。

「左様でござります。それに、四條隆資卿はあの大日堂にいらつしやいました。ここがいれば、籠城軍の總司令部で、正成館は、千早の御本丸と、ここを絶えず往復なされました」

左近はさう答へてから、附け足した。

「大塔宮様の御行衛が、朝敵に知れなかつたのも、それ故、道理でござりますよ。まさか、ここにおはさうとは、夢にも思はなかつたのです」

左近は、さういふと、歩きながら、

「この天險を擁して、館の精兵が、決死の防備をつかまつれば、賊の全軍が押寄せて參るとも、斷じて届することはござりませぬ。錦の御旗を、あくまでも衛り奉るべき楠お家の要害は——」

二人は、いつか、懸崖のふちまで來てゐた。見はるかす彼方、平野の果ては難波潟。

烟霞たゞよふ海原に、一響の青螺。それは淡路の島根であつた。

さらにはるけく、一抹の青黛。

ほのかに棚びくのは、これ武庫の山々でもあらう。

脚下の平野に、白い帯。それは、大和川の流れてある。

なんとといふ風光の佳さ。しかし——眺める正行の顔は暗澹として、朝敵への憤りに曇つてゐた。

「左近爺よ！ なぜ、父上は、尊氏、直義の逃げゆくあとを、追撃なさらなかつたのかね？」

「それは、この爺めにも、よくわかりかねますが、たぶん、長追ひをなさるに必要な兵力の無かつたことと、船の乏しかつた所爲だと思はれます。まつたく残念なことをごさりました。がしかし、これはおもへば、古語にいふ、隙を得て蜀を望むたぐひかも知れませぬ」

「といふと——破竹の勢で關東から、都へ侵入した足利の大軍を、父上でなければ、誰が、うち負かすことが出来よう、との意味なの？」

「おお、仰有るとほり！」

「たとへ、いまは一時、敵を逸しても、父上には御成算がおりなのだらう。なにしろ、父上のことだから……」

「おお眞に、寔に！」

左近は、おほえず眼頭の熱くなるのを感じた。

正行主従は、しばし立ちつくした。寺内の山伏どもが、慇懃な會釋をのこして、そばを通りすぎてゆく。

上 京

(その一)

正行は目を、輝かせてゐた。

京都の父から使者が来て、

「正行は、左近その他を具して、都に出てよ」

といふ言葉が、傳へられたからである。

(京都へ！)

さう思ふだけで、正行の若い心は躍つた。

(父の側へ行ける！)

父は、子どもたちに、京都生活をさせるのを好まなかつた。

都風俗を見真似ては、柔弱になる。武人の子らが、そんな育ち方をしては、將來朝廷のお役に立つまい。——正成はさう考へて、三人の子息のために、夫人にも都住ひをさせず、國元水分の屋敷で、もつばら質素な、そして剛健な教育を子どもに授けさせた。

しかし、正行は、だんだん物心をわかまへて來たので、いつも、父の傍らに起臥することが出來たら、どんなによからうと、思ひのぞんでゐた。

「母上、では行つて參ります」

水分屋敷の母に、上京のことをつけて、正行は、はればれと勇んでみた。

「正行の望みが、今度こそ叶ふかも知れませぬぞや」と、阿久の方は微笑んだのである。

「母上。わたくしの望みの第一は、初陣をしてみたいといふことですが——」

「その初陣。多分叶ふのではないかといふ氣が、この母もいたします」

「おお、初陣が出来たら！」

初陣の日の愉しさを思ひ泛べ、戦場の壮烈な光景を心に描いて、正行は、母に別れ、弟二人に元氣な言葉をのこして、京都へ發つてゆくのだつた。

(その二)

「もつと日に灼けなくては不可んぞ」

「は！」

「それから肉づきもあまり良くないやうだ。しかし、學問の方は大分進歩したといふことが、觀心寺の御坊から參つた手紙に書いてある」

正成は、二年ぶりて逢つたわが子の、目立つて伸びて來た背丈を、にこやかな眸で眺めながら、さう云つた。

父親の、どちらかといへば、小肥りて、色黒々と緊張つた短軀にくらべると、正行は、白哲で、瘦ぎすな體格であつた。

「父上。お恥かしいことには、學問も一向に進歩いたしません。ただ左近爺のお蔭で、劍法、槍術、馬術などを、すこしばかり覚えましたが、こんどの戰場には、ぜひお供を、初陣を——させて頂きたいと思ひます」

だが、父は、正行や阿久の方が期待したやうには、初陣のことにふれなかつた。

「そなたが、初陣を急ぐのは間違つてゐる。そなたとして一番大切なことは、肉體の鍛錬と、精神の持ち方ぢや。そなたが、肉體を強く、すこやかに錬成するには、金剛山麓は適はしい場所ぢや。しかも、そなたが、父の子として楠の後継者として、いかに生きなければならぬか、いかに働くべきか、それを知るためには、この父のわきに、しばらくの間、居るといふことが必要だと思ふ。もはや其方も、道を聽いてよい齡ぢや。聽いて、これを理解するだけの能力があると、さう父はみとめたが故に、こたび河内より呼び寄せた。——正行よ！ 父のいふ、道とは何か？ 答へてみい」

「道と仰有るのは、人間の踏まねばならぬ道のことと思ひます」と、正行が返辭をした。

「さうぢや。踐むやうに志さなくてはならぬ眞の人の道——すなはち、大義の原道ぢや。言ひかへれば、臣たる者の道。一天萬乘の大君に對し奉つて、いかに忠を盡すべきかの大なる道——この世において、最も嚴かなる道がそれぢや。それに就いて、なほ詳しく、細かくは、おひおひに話すといひさう」

正成は、さう云ふのだつた。

父の嚴肅な氣持が、はつきりと正行に感じられた。
その日以來——。
毎朝、毎晩、父は子に、諄々と説き訓へた。子は、神妙に、熱心に、眸をかがやかせつつ、それを聴きつづけた。

(その三)

やがて四月もすぎで、夏もどうやら、暑さを加へて來た。
中國、四國筋が、こぞつて叛旗をひるがへした。尊氏、直義が再舉して、備後まで東上した。遼へうつ新田軍は、苦戦をつゞけてゐる。そんな情報、續々と京都へ入つて來た。
公家衆は、仕事も手につかぬくらゐの狼狽ぶりではあつたが、それでも、
(まだ楠がをるかぎり、周章へることはないぞ!)
と、心中、いくぶんかは心強さを覺えるのだつた。
新田義貞が、白旗山城の圍みをといて、兵庫に退却したといふ早打の注進があつた。

「楠!」

「楠!」

「かゝる場合、正成でなければ!」

公家衆は、異口同音に叫んだ。

お召を受けて正成は、黙々と參内したのである。

御簾の奥の玉座には、畏くも主上がおはします。
防戦の策を、御下問あらせられた。正成は恐懼して、お答へ申しあげた。——だが、獻策は容れられなかつた。坊門宰相清忠の反對にあつたからである。

正成は、頭を垂れて、心で泣いてゐた。

流れざる泪は、はふり落つる涙よりも、どのくらゐ熱かつたかわからない。

それは、大君の、やんごとなき玉體のほとりを、憂へ奉る熱涙であつた。

「正成死力を盡して、無窮なる皇恩の億分の一に報い奉る!」

しばらくは、平伏したままであつた。

門 出

(その一)

兵は精兵であつたが、數は七百であつた。
みづから身を捨てる精神に徹底した正成は、曉開の寂莫のなかで、御所を遙拜した。諸兵みなこれにならつた。

兵馬は、肅々として、湊川への道を進んで行く。

下鳥羽の里の入口で、桂川を渡ると、中國街道は、その河原に沿うて——。やがて、大山崎の驛外れ。攝津の國へ入つて、今夜は山崎の宿泊であつた。

陰曆五月はもう夏中である。だがそれにしても、全く灼けるやうな炎天だつた。しかしその酷熱が淀の川風で、ややなごみかけた夕暮である。

正成は、水無瀬の御影堂の前に立つてゐた。山崎の宿から程遠からぬ、河原に臨む斜面で、男山の峠だつのが見える。

左近老と轡を並べて、軍の後尾に付き随つて来た正行は、身にびつたり合つた甲冑を帯けてゐた。この御堂にむかつて、正成は、わが子正行と相並んで、禮拜をすませた。

「弟」と、呼ばれて、正季が御堂前にすすんで、おなじく禮拜をとげた。

「左近その他」

正成の聲につれて、恩地左近をはじめ、随つて来てゐた人々が、みな額づいた。

「正行よ。この御影堂の内にこそ、後鳥羽院さまの御尊影を、奉安しまゐらせてある。勿體なくも後鳥羽上皇におかせられては、承久の變に、鎌倉幕府御討伐の聖慮を果たし給はず、絶海の孤島に御遷幸あそばし、おんわびしき十有九年をお悶しになられ、つひに崩御あらせられた」

「はい。かねて承つてをりまする」

「その折の御遺詔——すなはち御遺しになつた御置文を奉じて、院の忠臣、宰相中将信成の朝臣が、ここに御堂をおたてになつたのぢや。——正行よ。父が今、そなたに云つて聴かすのは、かしこくも今上の帝には、後鳥羽院のおん志を繼がせ給ひ、院のお果たしになれなかつた倒幕維新の御偉業を、

成就あそばされたといふことぢや。一たんは、主上も院の遷らせ給うた同じ隠岐の島に、おん物憂き月日をおすごしになつたとは申せ、聖運たちまち開けて、風聲を京都へお還しになり、政治をおんみづから覽そなはせらるる輝かしい、皇政復古の建武中興とはなつた。にもかかはらず、兇惡なる足利兄弟は、爪牙を磨ぎ、御維新の中心にお立ちあそばした大塔宮護良親王は、鎌倉でお薨れになつた。そして天下は實に憂ふべき大亂におちいつてしまつた。憎んでも憎んでも、なほ憎み足りぬ尊氏、直義であるぞ！」

激しい流れの歴史の中に身をおきながら、正成は、さう訓へて、しばしの間はわが子の顔を凝視めたままでゐた。

しづかに、夕暮が、男山を蒼然と染め、しげる蘆荻の上にしのびよつて来た。

「正行。そなたは父が、兵庫への出陣に際して、そなたと共に、山崎の河原、ここ水無瀬の御影堂に、額づいたことを、ふかく頭に刻みつけて忘るるなよ！」

(その二)

その翌日。

東雲かすかに白むころ。

隊伍は行進をおこした。正行は、やはり、後尾に左近と馬を並べた。

ゆふべは父から、二晌にわたつて教訓を聴いたのである。父は、神代このかたの日本國の國體を説いて、皇室の尊嚴なる所以を話した。國家の歴史についての概念を與へてから、莊園の制度と武士の

起源を語り、武士の自分が誤つて埋没されたために、公武の相剋が生じ、鎌倉幕府が政權をにぎるやうになつて承久の變がおこり、さらに今上の聖天子、北條御討伐の擧にいたるまでの事柄を、すめらみくにの純臣としての立場から、批判し、解釋してきかせた。

正行は、

(お供は到底、かなひさうもない！)

と、おもふと、胸が、しめつけられるやうな氣がした。

かなりまへから、薄々と、初陣のなほはぬことを察してゐたが、きのふも晝間、そのことを左近老にいひ出して叱られたのである。にもかかはらず、もう一度父に願つてみようと思ひさだめて、昨夜父の前に坐つたのであるが、つひに言ひ出せずじまつた。

ほとんど、まんじりともせず、夜を明した正行は、いま小馬の上で、すこし眩暈をおぼえた。

「若様。どうぞなされたか？」

と、左近が危げに問ふ。

「いや、どうもせぬ」

目を瞑り、眉のあひだを擽めながらも、うなじを伸ばして、顔をもたげた。

「もうかれこれ、奥方様のお着きなされます時刻ぢや。をとつひの早打ちでおしらせ申しあげたのだから、今朝の夜明け前には、御無理でござりませうが、たぶん筋は、櫻井でお待ちなされるおつもりらしい。」

左近は、なかばひとりごとのやうに呟く。

櫻井驛

(その一)

山崎と櫻井とは、ほど宿場つづきであつた。中空はまだ薄暗かつたが、男山の山背は茜いろに染まりはじめた。

(母上が、わたしの願ひを、助けて下さるといいのだがなあ——。どうぞ、この子を、兵庫の戰場へおつれあそばすやうにと、口を添へて頂けないものかしら?)

櫻井驛を出はづれて、すこしばかり行つた時、急に隊伍はとまつた。

「おお、あれにお見えてござります」

と、一人の騎士が叫ぶ。

七百人の視線は、ことごとく河原の方角をみつめる。

「正行をよべ。左近にも、共に、と申せ」

と、路ばたの森へ座を設けさせた正成が、さう命じた。

傾斜地の林の蔭から、數騎の武者と、十名あまりの兵に附添はれて、河内東條から、翼ほしきの想ひの夫人阿久の方を乗せた轎が、つと現れ出たのであつた。

(その二)

正成は、牀几に腰掛けてゐた。

左わきに布かれた楯の上に、正季が胡坐してゐる。右わきに、一族が並んでゐる。

阿久の方の兄、南江朝忠もその後の方に坐つてゐた。

正成が、黙したまま、前の敷楯の座をさした。

奥方が坐ると、正行は、

「青いお顔だ！」

と、思つた。

「あそこに」

と、正成が、正行に云つた。

正行は、母のそばへ行つて、楯の上に坐つた。

水をうつたやうな静けさが、あたり一面に、さつと流れた。

「阿久」

「……………」

「お前を、わざわざ呼びよせたのは、正行を、おまへに託して、ここから東條へ還すためぢや。こたびの出陣——。わしは生きて戻らぬ戦に赴く。武人が戦場にのぞむ場合、誰でも覺悟は持つてゐよう。しかしまた、必ず勝てるといふ目算の立つ戦ならば、時に生還も期待できる。いま正成は、二十萬と號する賊軍を防がねばならない。必敗萬死の戦にはちがひない。だが——。だが、わしは大命を拜し

た。畏くも大命を拜したからには、事の成否は問ふべきでない。これは、おまへにも領けるであらうな？」

「はい！」

奥方の蒼ざめてゐた顔にも、このとき、ほの紅い血の色がさした。おごそかに良人の魂を感じて、精神がふるひ起つたのである。

「勝敗を考へて進退すべきでないことがわかれば、もはや多くはいふまい。畏みて大命を拜受した以上、唯ひたむきな死力を竭せばよいのだ、事の成否を超越して、な」

さういふと正成は、わが嫡男と、わが妻とを、やや長くみつめて、

「臣の臣たる眞の道——すなはち大義と申すものは、今生一代のものではないぞよ。正行も、よく、聴けよ！」

子も妻も、正成の顔に、ちつと瞳をこらした。

「わしが、兵庫で、湊川のほとりて討死せば、世は再び幕府の権力によつて占められるであらう。尊氏は、政權を恣にして、かならずや大きな利益を餌に、河内・和泉を釣らうとする。心しなければならぬのは、その誘ひの魔の手に對してぢや。もちろん正成はいま、大義を行ふ志、そのものが千載不朽なのであると信じてゐる。父が、この志を抱いて戦死すれば、精神は子に、そして孫に、曾孫に傳はり、さらに廣く世の人の心にも深く響き傳へられるであらう。子や、孫、曾孫が、父の志を生かし、その精神が、世の中に生き残れば、つねに大義の道は示されて、未來永劫に、ほろびないだらう」

正成は、ちよつと言葉を切つて、深く呼吸した。すぐ、言葉が熱をこめて、續く。

「わしの討死を批評して、なぜ金剛山に退いて後圖を成さぬか？ それが却つて、大局からみて大君への誠忠ではないのか？ さういふ者も多からう。だがわしは、實に得がたい死所を得て討死するのだ。かくの如き國家非常の際でなくば、行ひ難いことを、しかも辱けなき勅命を擔つて行ひ得る自分を、仕合せと思つて欣ぶ。一死を以て聖恩に報い奉り、正季をはじめ一族郎黨すべて七百人をも、わしと共に死なせて、そしてまた、わしとともに後世に生かさうと思ふ」

(その三)

正成は、恩賜の短刀を、わが子に與へた。

訣別の盃が酌まれた。

奥方が、

「次郎と虎夜叉も——つれて参りたうございました！」

さう、いふと、正成は、かすかに笑つて、

「頑でないものには、やがての時、よく語り聽かせてくれ」

盃が納まると、

「恩地」

「はあ！」

左近は、あわてて涙を拭つた。

「阿久さへ泣き顔を見せぬのに、おことが——」

「恐れ入りましたござる」

「いや、よい。後事をたのむぞ」

正成は、正行の教育に關して、こまごまと、左近に頼むところがあつた。

「正行が學んだら、學び得た事を實踐させてくれ。頼む。要するに、實踐のための學であるから、實踐を伴はずば、學ぶ效なしぢや」

左近への言葉が終ると、

「阿久。さらば正行と共に歸れ！」

と、云つた。

「はい！ そんならこれで、おわかれ致しまする。どうぞ御本懐の御忠義を、御ぞんぶんに、おと

げあそばすやうに——」

奥方は、討死といふ代りに、忠義を遂げて下さいと云つたのであつた。

正行が

「では、父上つ！」

と、眸をあげた。奥方もまた視線を据ゑた。

——これぞ、父子、夫妻の、永訣なのである。

「む。わしは存分に戰つて、人臣の道を、不易の方向を、後世に示す。正行よ、父を繼げ！ 阿久、

次郎と虎夜叉をも頼んだぞよ！」

正成は胡牀から立つた。

正行が、楯からおりた。

阿久の方が、これも楯から離れた。

正成は、天を仰いで、静かに、しかも力強く、云つた。

「わし亡き後、楠の一族は逆賊と戦つて、闘ひぬくてあらう。よしや、わが一族こそつて全滅にはうとも、わが精神は、断じて滅びることなく、天下に、國家に——國難來るたびごとに、心ある人々の胸に、潑刺と宿り、生々と躍動して、敢然たる奮起を促すであらうぞ！」

正成は、歩き出した。

正季をはじめ従弟の彌四郎、義弟の和田以下、並居る部將らは、いづれも涙を、溜めてゐた。涙を

すする者もあつた。拳で眼を抑へた。掌で頬の涙滴を拂つた。

たとへやうもない感激に迫られたのだ。

悲壯を超えて、莊嚴といふほかない別離であつた。

やがて。

列は動き出す。

木の下蔭から離れて、佇んで見送る子と。妻と。老臣と。

左近の乗りすてておいた馬が、ひとこゑ高く嘶いた。

正行が、

「おさらばア！」

と叫んだ。手を振つた。

しかし父だけは、一度も振り向いて呉れなかつた。

湊川の最期

説得

(その一)

車軸を流すやうな大雨。風さへ烈しく加はつて、大暴風雨。
正成は、尼ヶ崎へ着いた。

この大荒れを冒して、夜半の間を辿りながら、和田助氏が五百の兵を率ゐて到着した。

河内からの報せて、助氏は、正成出陣のことを知つた。國元の兵は参加すべからず、といふ命令も同時に受取つた。

(生還を期せざるこたびの御出陣。たとへ命令に違背しても、これを黙つて見てをられようか。館とともに――)

と、思ふと、すぐ駆けつけた助氏である。

「戻れ！」

と、正成は、斷乎として、歸還を命じた。

助氏は、泣いて従軍を乞うた。しかし、許されなかつた。

「後を守らねばならぬ。そなたの兵は、一兵たりとも兵庫で死なすべきではない。河内、和泉の防衛

が、いかに大事であるか、よく存じてをらう。わしなきあと、わしの精神を永劫に傳へうるのは、河泉二國をのぞいてはない！ 大義は一世一代ではない！ 後を頼む」

(その二)

助氏は、しほくと歸つて行つた。

武庫川が汎濫して、楠勢は、肝心の新田軍としばらくの間は連絡がとれなかつたが、やがて、正成自身が新田の陣營へやつて來た。

(楠氏は本邦不世出の戦術家ぢや。正成殿がくれば、安心ぢや)

義貞は、久しい懔ほれの、ほぐれた想ひであつた。

正成は義貞と對座した。

三月以來の義貞の苦衷。兵庫を死守すべき覺悟をきめねばならなかつた新田軍の苦闘に對して、正成は、心中同情を禁じ得なかつた。だから、自分の敵策が用ひられずして出陣におよんだ顛末については、おほくを語らなかつた。

で、義貞も、正成の言葉へは、一々うなづきを示しつつ、聽いてゐたが、楠の兵力の實數がわかると、おほえず顔色を、さつと、變へた、

「や、何と！ 七百——七百でござるかッ？」

「いかにも」

正成は、沈重であつた。

「はなはだ無勢ではござれど、身ども、最期の戦つかまつる！」

「ヤツ！ 最期の戦と申さるるか！」

ぐいツと、胸の奥を、衝かれた義貞であつた。

切々とした正成の衷情を、義貞は、感にうたれつつ、心のうちで幾度も繰返し繰返し、検討してみるのでつた。

正成は、つひに義貞を説得した。はじめ義貞は、わづか七百の楠勢を全滅するまで闘はせ、みづから率ゐる二萬の兵に、戦前すでに退路を考へてやるやうな作戦には、なんとしても賛同しなかつたのであるが――。しかし、正成は、満腔の赤誠を吐露して、官軍の總帥たる新田の責務が、かりそめの毀譽褒貶を顧みるべきでないといふことを、言葉をはめて繰りかへし、たうたう義貞をして、拒戦かなはずして敗軍の形勢さだまるにおいては、かならず退却することを、かたく固く約束させたのである。

肩の重荷が一つおりたやうに、心のかるくなつたのを覺えて、正成は、ゆるくめぐる湊川の岸邊に立つた。

(その三)

憂！ 憂と、馬蹄がなる。

鹽打山の坂道を馳せくだつて、武者十數騎が、正成の佇んでゐる方へ近づいて来る。

「これは菊地肥後守武重なり。楠どのに御意得たい！」

故武時入道寂阿の長男で、かの九州多々羅濱に足利兄弟と激しく戦つた菊地武敏の兄であつた。

武重は、こたびの正成の志を聞いて、ぜひもろともに討死したいと申し立てた。

しかし、正成は領かなかつた。

武重は、ほとんど嗚咽するやうに頭をたれて、幾度もくりかへして頼んだ。だが、正成は、こゝで武重をも説得した。

「この湊川で、鴻大窮まりなき大君の聖恩に、萬分の一なりとも報いたてまつるべく、討死できる正成は幸福でござる。肥後殿、よろこんでくださいなれ！」

それが、正成の別れのことばであつた。

馬を曳いて、やうやく迫る黄昏の、湊川の橋だもとて、兩人は別れたのである。二十三夜の月の出はおそかつた。

七 生 報 國

(その一)

たたかひの前日。

正成は重立つた部將をつれて、會下山に登り、前後左右の地形を観察してみた。作戦は成つた。

「正季！ おことは右翼となつて、古道筋から寄せる敵を挫いでくれ」

さういふと、ぐるり體のむきをかへ、西につらなる連山を指しながら、

「敵は、一ノ谷の故事にならつて、逆に一ノ谷方面から鴨越を越えてくると思ふ。海陸呼應して攻めかかるであらうが、この鴨越へは、かなり有力な部隊を迂回させるにちがひない。——それから、左衛門！」

「はつ」

と、貴志左衛門が、進み出た。

「そなたにたのむ。左翼をひきみて、敵大手軍の先鋒を蹴散らしてほしい。先鋒の將は、高經か、さもなければ赤松であらう」

「は！」

貴志左衛門は、紀州貴志庄の地頭で、楠氏股肱の部將だ。

（ああ、この名將の司令の下に戦つて死するといふことは、武士の冥加だ！ 館は敵軍來らざる前に、はやくもその陣形と行動を、御洞察になつてゐる。正季殿が古道口を防ぎ、この左衛門が大手の先陣を突き崩す間に、館御みづから敵帥直義の本陣へ、まつしぐらに突貫なさるお心であらう）
かう思ふと左衛門は、全身が闘志の塊りのやうになつて、

（直義の首は、かならず獲られる！）

と、感じた。

熾んなるかな、魂

部將たちは、いづれも眼を、らんらんと輝かして正成を見つめた。その注目に答へて、正成は、

「兵は至善を以て第一となす。みづから直くんば千萬人といへども吾往かん」

さう云つたのである。

澎湃たる楠精神が、主と従とに交流して、いかなる大敵をも粉碎せずんばやまぬ鐵血を、たぎり立たせた。

(その二)

しかし。

敵將直義は、奇蹟的に命びろひをして遁れた。五月二十五日の決戦の日のことである。

「た、直義めを——馬を斬つたのみで、の、の、遁しました。無念です！」

さういつて、彌四郎は正成の前に俯伏してしまつた。

「む、直義を逸したからには尊氏だ。尊氏を斬らうぞ！」

さういふ正成も、もう身に幾箇所かの傷をうけてゐた。

「——召集の鉦つ」

楠勢の殘兵は、追々集つて來る。正季も、血路を斬りひらいて辿りついた。殘兵三百である。

三百の兵をもつて陣をたて直し、ふたたび敵の中へ突入してゆく。だが、この時にはすでに、敵の尊氏、師直の大軍に、細川の援軍さへ加はつて、楠勢は十重二十重に包圍されてゐた。

いつのまにか、正成も正季も、はなればなれになつてゐた。一度逢ひ、二度逢ひ、つひに六度別れ

て、六度逢つたのである。この間に、百餘人の楠兵が斃れた。六度目に相逢うた時、

「弟ッ！ まだ働けるか？」

「もう是れまでです！」

「さうか。わしも同様ぢや。そんなら死場所を湊川の北、紺部の廣嚴寺にもとめようぞ！」

(その三)

「兄上ッ」

正成が、血のべつたりついてゐる兜をぬいたとき、正季の唖れかすれた聲がきこえた。

「おお弟！ つひに七度逢へたのう」

正成の硬ばつた頬には、ほほゑみすら定かには泛ばなかつた。が——眼だけは、明澄な微笑をたたへてゐた。

辛うじて敵の重圍をきりぬけて、集ることができた郎黨は、わづか七十餘人。しかも、ほとんど全部が重傷者であつた。

「太郎兵衛ッ！」

と、正成が招くやうに呼んだ。

神宮寺太郎兵衛正房は、傷つきながらも足腰の満足に利く一人だつた。

「太郎兵衛、そなた一人だけは河内へ、水分へ還つてくれ！」

「え、つ！ 何と仰せられますか？」

「けふの合戦のさまを——正成の最期のさまを、還つて、正行に傳へてほしい。語りきかせて、左近ともども、後見をして、わしの志を十分に繼がしてほしいのだ！ 一人生き還るはつらからう。それは察する。しかし其方をおいて、他に人がないゆゑ、わしは命ずる。還れ！」

「館ッ！」

「ええ還れと申すに！」

「——はあ！」

返すことばがなかつた。ただ、頭をさげた。命令であるから。

「正房。あの菊水の旗と、わしの馬印を、水分へ持ち歸つてくれ——」

(その四)

「正季！」

弟を、正成は呼んだ。そして立つた。傷つける脚を引摺りながら縁側まで出てゆく主君を、人々はながめた。よばれた正季は、兄のあとに跟いて、これも縁側へ出て行つた。

そこには水桶があつた。正成は柄杓をとつて、手に注ぎ、血で汚れた自分の顔を、洗ひ淨めた。

正季も、兄について、それに倣つたのであるが、おもはず、

(おう!) と、襟を正した。

正成が、東北、京都の方向にむかつて、つと、ひれ伏したからである。

いとも恭しき聲が、正成の唇から洩れた。

「臣楠、逆賊の軍を湊川にむかへ撃つて、勝たず、ここに斃れて罷みまする。しかしながら、屍を去つても魂はあくまでも朝敵と戦ひまする！ 冥々の魂魄にも、護國の志は宿りまする！ これ今生のおんいとま乞ひ。聖壽萬歳！」

正季をはじめ、人々は——はつとばかり額を廣間の敷板に、すりつけた。

敬虔な、嚴かな静寂が、あたりを支配した。

おもむろに正成は、居すまひを向けかへて、正季と向ひあつた。

互に刺しちがへるための脇差の鞘が、しづかに拂はれた。

「弟よ！ 人間は死に臨むと、最後の願ひごとがあるといふ。おことの願ひは何か？」

「七度人間に生を享けて、朝敵を殲滅することとござる！」

「お、七生報國！ 正成の願望も、まさしくそれぢや」

「兄上つ」

緊と、双つの左の手が握り合つて、又が光つた。

遺訓

ふたりの生還者

(その一)

「若様つ、若様つ！」

恩地左近の聲である。

うたた寝のしとねから正行は、はね起きて、燈火の光で、左近の悲痛に歪んだ表情を見詰めるまでもなく、自分を呼んだ非常な聲音で咄嗟に、それと悟つて、

「お、つひに御討死かッ？」

と、叫んだ。

戰場から、半死半生の體で戻つたのは太郎兵衛と、富田の竹童であつた。使者に逢ふべく、正行が立上つたときに、阿久の方は、もう入口に端然と立つてゐた。

「母上つ！」

正行は、つと走りよる。

だが、阿久の方は、すこしも取亂した態がなく、

「嘆くまいぞ、正行。櫻井の宿でのお訓へを、しかと頭に置いて、どのやうにお勇ましく、いかばか

り雄猛く、逆賊何十萬を物ともなされず、お戦ひになつたか、御奮闘の末いかに御見事な御最期をおとげあそばしたか、とくと、太郎兵衛から、竹童丸から、お聞きなさい！ さあ、母もともく、ふたりの注進を聞きませうぞや」

さう云つて、わが長男を先に立てて、ふたりの歸還者が、倒れたまま傷の手當をうけてゐる廣敷へ入つてゆく。

(その二)

疵は五箇所や十箇所ではない。満身これ創夷、殆んど死相さへ現れてゐる。しかし、太郎兵衛は、むつくと上體をおこして、双手をついた。竹童丸もおくれず起き直つて平伏した。

「語れ、詳さに語つてくれ！」

と、正行が、けな氣な面ざして、うながす。

太郎兵衛は、まづ若殿の顔をうち仰ぎ、それから奥方阿久の方を眺めると、感極つたのであらう。たちまち、男泣きに嗚咽した。

その嗚咽で、竹童丸も怵へ難くなつて啜りあげた。

集まつてゐた人々も、みな諸共に涙をすすつた。廣間の縁先に焚かれる篝火が、涙のために、かすんで、臙ろに見える。恩地が、

「神宮寺つ！ 心を毅く！」

と、太郎兵衛をはげました時。

「お母様ア！」と、稚い呼び聲。

——末子の虎夜叉。ことし八つの三男が走つてきた。そのあとから次郎丸。十一歳の次男が小姓たちをつれて、父正成戦死の報せを聞きに、いま寝間からとび出してきたのだ。

「静かにおし」

と、阿久の方は、虎夜叉の小さい肩に、手をかけた。

次郎丸は、兄正行のうしろに寄り添ふ。

太郎兵衛が語り出した。

聽く者は、ひとしく固唾をのんで、息をつめた。

「——一昨々日、二十五日の朝まだき。明石の沖、淡路の瀬戸、舞子の浦へ、押よせた敵の船は、海面を掩うて、その數かぞへつくされぬ程——尊氏の率ゐるこのおびただし兵船が……」

太郎兵衛は、苦痛をこらへて、物凄戦況をつぶさに報告するのである。

聽く者は、こぶしを握り、齒をかみしめて、目をかがやかせてゐた。

「正成館は御本陣、會下山の山上より、この有様を御覽なされ、人間が眞に忠義に凝つて命限り闘へば、果してどれだけ闘へるものか、今日ぞ、最後に試して死なうと思ふ。さう仰せられたのですつ！ 我兵一人が敵百人と戦へば、七百の寡兵と雖も、七萬の敵をも破ることが出来る。二百人と戦へば、十四萬の敵怖るるに足らずと、われわれは奮然と、さながら灼熱の鐵のやうな覺悟で突撃したのでこ

ざりまする！」

語る神宮寺太郎兵衛は、われとわが身をはげまし、勵ましてゐた。

「私は館御兄弟が、お刺しちがへになつた御最期を、お見届けいたしました。宗徒の者十三名が、その場で殉死仕つた。奥方御實家のおん兄者びと南江朝忠もその一人でござりました。私の老いたる父正師も、死出の御旅にお供が叶ひました」

竹童丸の死

(その一)

太郎兵衛正房が、報告の長物語をすませた氣の緩みから、ぐつたり崩折れた時。

竹童丸は突如、脇差を引き抜いて、自分の喉を刺さうとした。呀つと驚いた人々が、とびかかつてその自害を妨げたのである。脇差が、もぎ取られた。抑へられた竹童丸は、聲をふりしほつた。

「どうぞ、死なせて下され！」

「竹童、なにゆゑの自害ぞツ！」

と、むつくり頭を擡げて、太郎兵衛がこれを詰り問ふ。竹童丸は、これに答へて、

「太郎兵衛どのは、館さまの御委託を承つた御身です。ひとり擇ばれて、汝、水分に還り、正行にかじか語り告げよ！ 湊川の生き記念として生き残れ！ さう仰せつかつた御身でござるが、それにひきかへ私は、おん館御最期の廣嚴寺へもお供出來ず、戰場に倒れて死骸のあひだて息絶ゆるのを待

つてゐたのでござりまする！ それを、それを——」

一同は、しんとしづまつて、息を凝してゐる。竹童丸は、咽ぶやうに、言葉をつづける。

「ゆくりなくも太郎兵衛どのに扶け起され、勵まされまして、ここまで命永らへましたなれど、すでに御注進を果せば、一刻も長らふべき身ではござりませぬ！ 私の父、富田七郎正武は、廣嚴寺において殉死をとげてをりまする。おくればせながら私も、冥途のお供の列に馳せ加はりたうござるツ！」かう云つて、支へる人々の手を振り放さうとして、もがいた。

(その二)

阿久の方は、

「そなたが死を急ぐ氣持はよくわかります。けつして無理とは思はぬぞや。しかし湊川からその重傷に堪へて、かうして水分に立戻つたからには、和子のため、そなたの一命は、この阿久に預けてほしい！」

と、いふのだつた。

「はッ！ では仰せに従ひまする」

竹童丸は、かしこまつてさう答へた。

しかし——その翌日。

細々と遺書をしたためて、腹掻き切つて死をとげたのであつた。竹童丸の自害を聞いた太郎兵衛は、

「お、つひに死んだか！ 竹童は湊川の河原で、わしに扶けられたのだが、自分の深傷にもかかはらず、わしの傷を心もとなく感じたに違ひなかつた。もしかわしが、河内への途中で斃れたら、誰が御注進をする。竹童はそれを案じたのだ。わしと一緒に水分にたどりついた上で死なう。この覺悟だつた。嗚呼！ さりとて天晴れの若者よ！ さすがは富田の伴ちや」と、おもはず呟かすにはみられなかつた。

正成の首

(その一)

正成の首を持つた世瀬川入道祐隣が、河内東條の楠本邸、水分屋敷に着いたのは、六月三日であつた。

京六條の河原に晒首にした正成の首を、尊氏がことさらに、遺族の許へ送り届けたのは、下心あつてのことであつた。

(楠の遺族の者の氣を弱らす手段として)

と、考へたからである。

恩地左近が、ただちに赤坂城から呼ばれた。左近は、正行の後見の重責をもつ身だけに、きはめて慎重を期して、後室阿久の方と充分に相談を練つたのち、足利の使者のもたらした首桶を、表書院で受取ることにした。

世瀬川入道は、恩地に對面して、尊氏の口上を述べた。

それは實に巧みな演説であつた。足利は朝廷に弓ひくは本意でない。無實の讒にあひ、罪なきことを楠氏をもつて、上聞にお達し願はうと思つてゐるうちに、すべてが齟齬つてああいふことになつたのである。楠氏は前代未聞の名將。尊氏追悼のあまり、御遺族の御悲嘆をおもひやつて、かく御首級を送りとどけたのである。今から後、尊氏に仇することなくば、河内、和泉、攝津の三箇國へは、當方の兵をさし向けない、といふ挨拶であつた。

世瀬川が差出した首桶を、恩地左近が、受けとつて、蓋を除けた。

しづかに首を檢める。

おお、何と變はり果てたその状——だが、まさしく、故殿正成の首。

激しくこみあげてくる感情を、あらん限りの力で、ちいつと抑へつつ、首桶の蓋を閉ぢた。

「しかと御受取り申した。御厚情は、忝しと存ずる。——さりながら」

恩地はたちまち、毅然たる面持になつて、

「この感謝はこれ、單なる私情のお禮のみ。故館は畏くも論旨によつて、朝敵足利に合戦を挑んだものでござる。朝敵はすなはち逆賊。俱に天を戴くべからず。逆賊尊氏はあくまで楠の遺族の寇でござる。われらの當主正行は、年若けれど、父の志を繼ぐもの。足利の大軍寄せなば寄せよ、毫も恐るる所にあらず。この恩地滿一、主君正行に代つて御返答、かくの通り。——間違なく復命されよ！」

きつぱり撥ねつけた。

奸詐狡猾の誘ひの手を、堂々と拂ひのけたのは流石であつた。

「さりとは餘りにも膠がない。御一酷ぢや！」

と、入道が云つた。

「黙られい！」

正成の眼識は、たがはなかつた。櫻井驛から嫡男正行に附けて、河内東條の水分屋敷に還らせた恩地左近なのである。

湊川の全滅にも怯む氣色さらになき、まこと凛々しい、強硬な態度だ。

(もちろんだ。七たび生れて逆賊を討つと仰せられたではないか)

恩地は、するどく世瀬川入道を睨んだ。案に相違して入道は、すくみ縮んだ。

(その二)

ぞつと身顛ひの出るおもひで、世瀬川入道は、すごすごと立ちかへつて行つた。何か底知れぬ凄さをたたへた楠家である。

使者が立去ると、水分屋敷では家臣たちが申合はせて、

「故館の殿のおん面影を、今一度拜みたく存じまする」

これを許すべきかどうかを、後室は恩地にたづねた。

「いかゞであらう、八日ほど経つた御首級ゆゑ——」

恩地は、かぶりを振つて、

「これは拜ませねばなりませんぞ！」

斷乎と答へたので、阿久の方も即座に心をきめて、

「そんなら」

と、許可をあたへた。

上下赤坂の兩城、千早城、その他の城砦から、家子郎従が召集されて、首級を拜し得たのである。

陰沈たる夜の寂寞に、一語を發する人もない。蒸著き風、はたと止んで、ただすすり泣く音のみが

聞こえる。

ことわり哉、この慟哭。

まこと禁じがたい泪なのである。

(その三)

埋葬は明日のこと。今夜はわざと半通夜。さういふ觸れが出た。

觀心寺の瀧覺御坊が導師となつて、いと懇ろな讀經が了はり、香煙屋にみちて、戶外に柵びくとき、

正成の首は大書院から、持佛堂へ移された。

けれども、人々は動かうともしない。ぎつしりと立錐の餘地もなく室の内外、庭の隅々まで埋めた

同族家臣の老若男女は、いづれもしめやかに故館の在はせし目を偲び、遺徳のかずかずを語りあひ、

つきせぬ嘆きに沈むのである。

阿久の方は、瀧覺導師が寺に歸つてゆくのを送り出し、ふたたび書院に戻らうとした。

と、そのとき、

(おやツ、正行は何處に?)

あたりを見廻したが、嫡男の姿はない。持佛堂から我身のあとに跟いて来たものとばかり思つてゐたのに――。

書院の廊から、末子の虎夜叉が、まだ頑是なさの物珍らしさから、寝ようともせず、元氣よく駆けてきて、

「お母アさま。夜叉は朝まで起きてゐるの。ちつともねむくないから」

と、云ふ。後室が、正行の所在を訊ねると、

「知らない」

と、答へる。後室は、かさねて質した。

「お兄様は、さつきから見えないの?」

「次郎兄様はさつきから、あそこに坐つてゐるけれど」

稚い子には母の思案顔が面白くなかつた。そばにゐても詰らないと思つたらしく、すぐに書院の方へ走り戻つて行く。

さつと、後室の脳裡をかすめるものがある。

俄かに、ぎゆつと、臟腑を衝かれた。

或る一事が心に泛んで来たのだ。實に由々敷い不安が湧く。

(まさか!) とは思ひながらも。

思はず、足が小走りに、持佛堂への渡廊下を急がずには、ゐられなかつた。

——嫡男正行の痛切な面ざし——父の首を見た刹那の、悲嘆やる方なき眼の色。それを今、容易ならぬ出来事に結びつけて、ぎよつとしながら。

(どうぞ、どうぞ我身の思ひすごしてあつてほしい!)

(その四)

人なき持佛堂。

ひとり正行は、嚴肅な態度で、端然と坐してゐた。

十三歳にしては随分大人びた姿である。黙々と父の首桶をうち眺め、なにごとかを祈念するにちがひなかつた。時々、目をつぶる。

佛前の燈明が、風なきにゆらゆらと動き、うしろに落ちた正行の影が、敷疊に、ほんの微かに揺らめく。しのびやかに、夜が更けて行く。

やや暫くして――。

膝の前に置いてある一振の脇差を――それは櫻井驛で、父正成から授けられた形見だつた。金銀を鏤めた美麗な造りで、「菊の劍」と名づけられた恩賜祕藏の品であつた。

正行は、それを手にとつた。押し戴いて、おもむろに鞘を拂ふ。

きらり! 燈明の光が、白刃にうつる。

——その時である。

入側で、先刻からひそかに、覗いてゐた母後室は、おぼえず叫んだ。

「やよ待て！ 正行！」

つと走り寄つて、「菊の劍」もつ手に取縛る。だが正行は少しもさわがず、

「母上、なにを、あわてなされますか？」

「えッ！ 何をとは、我身の申すことですッ！」

「これさ、おうろたへなされますな、母上はなにか思ひ違へをしていらつしやいまする」

「正行つ、おみは、櫻井の宿での御教訓を、よもやお忘れはあるまいのう！ 楠氏の長男に生まれて、父上の御志を受け継ぐべき身の、大切な命を、なぜさう軽んじるのですか？」

後室は、正行の手から「菊の劍」をうばひ取り、坐り直して容をあらためた。

すると正行もまた、行儀を正して、おごそかに口を開いた。

「母上は、この正行を、さまで心弱い子と思召しますか？ 正行は決して自害などは思ひ泛べませぬ。

父上の御首級を見て、悲しくは感じました。なれど、悲しむのはもとより當然の情でござりませう。

が、いかに悲しめばとて、私は、父上の御教訓に背くやうなことは致しませぬ。また、悲しみのため、亂心いたすやうなこともござりませぬ」

「では、何ゆゑの……」

「はい。只今ここで、お形見の劍を——鞘から抜いて眺めましたのは、この劍で、この切尖で、憎い

逆賊尊氏を刺さうと、自分の心に堅く誓ふためでござりました。——母上、なにとぞお案じなさいますな！」

さう云つて、深く頭を下げた。

（お、それでこそ！）

後室は、胸のつかへを、ほつとおろして、首桶にむかつて、度々しく、つむりを垂れた。

燈明が、またひとしきり、ゆらぐ。

遺 児 た ち

（その一）

（この子である。この子に父の志を継がせて、大君のため、君國のために、逆賊尊氏を滅ぼさせねばならない。それがわが夫より托された妻のつとめであり、母の道である）

阿久の方の覺悟は固かつた。

だが世の中は、忠臣たちの身を捨てての大義にもかかはらず、日を経、月を経て、足利氏の掌中に慥と握られてしまつた。

畏くも龍駕は、比叡の山門へとお遁れあそばした。そしてさらに吉野へ、御潛幸のやむなきに立至つたのである。

なんといふ不忠不義な尊氏兄弟であらうか。

聞くにつけ、見るにつけ、若い正行の心はともすれば、逸りがちになつた。

(父上の御無念をはらしたい！ 七たび生れかはつてと仰せられた父上の、御志をはやく具現したい！ 子としての道、臣としての道は、ただそれを履行する以外にはないのだ！)

(その二)

義貞が北國へ落ちた。そして、やがて河合の庄に再舉を謀つたといへ、こころざしむなしく藤島、燈明寺の露と消えたのは、曆應元年閏七月である。

世間のさわがしいうちにも、ここ水分局敷の朝夕は、しづかであつた。

觀心寺の境内の公孫樹が黄葉して、本堂といはず石燈といはず、境内一面に黄の絨毯を敷きつめた。秋も終りの頃であつた。

「わーつ」

と、あがつた喚聲。

すぐつづいて、

「尊氏！ 見參ぢや！」

と、叫ぶ聲。

「それつ！ 直義を捕へろ！ 尊氏の首を討て！」

子供たちの戦遊びだつた。

今日もまた、なき正成の墓參に觀心寺へ詣つた後室阿久の方は、この子供たちの叫びを耳にし

て、ふと立ちどまつた。木陰から眺めると、次郎丸がいましも木太刀をふりあげて、尊氏に扮した兒の首を斬らうとしてゐる。

虎夜叉が、小さいながらも、直義に扮したらしい大きな男兒を、纏縛つてゐた。

ふと、後室は眼頭が熱くなつて來た。子供たちの健氣さに對するよろこびの心が、じつと抑へようとしても抑へきれぬ嬉し涙を、湧き出させたのである。

「楠正成の二男、次郎丸が、朝敵尊氏を討ちとつたり！」

と、いふのにつづいて、

「同じく三男、虎夜叉、直義を生捕つたり！」

と、稚い口で、高らかに叫ぶ。

晩秋の黄昏に近い、淡い日ざしが、幼子たちの圓らかな瞳から頬を、あかるく輝してゐた。

(おゝ！ わが夫は、ここになほ生きつづけていらつしやる！)

阿久の方は、飽かず、ちいつと目をこらしてゐた。

父の魂をうけ、大義の血をそのままうけて、子達は健やかに成長してくれる。亡き父の熱いまなざしが、いつも子供たちの上を離れずに、あの世から見守つてゐるのを、しみじみと知つた心強さが、また身内から湧き上つて來た。

(その三)

「若つ！ そのやうに心弱いことで、いかながなされますッ！」

左近の聲はきびしかつた。

仰向けに枕をあてて臥してゐた正行の、病みつかれた額は蒼白く、あぶら汗がじつとりと滲み出てゐた。眼がくぼんでゐる。

「たかがお熱の高いぐらゐで、そのやうにお氣をおとされて、正成御館の烈々たるお志が、つげまするか？ それにいまのお言葉は、なんといふこととござります！ 爺よ、わしの病氣はなほるかな、などと。かりそめにも、武士たる者の申すことばではござりませぬぞ。普段から、この左近爺は、そのやうに御教育申上げた覺えはありませぬ！」

軽くとちた正行の双眼から、泪が流れ出た。

「いかがでござります、爺の申すことがおわかりになりましたか？」

と、いひながら左近は、正行のこの泪を見た。

強く突放したものの、まだ十五歳の正行である。十日近くも病床に呻吟してゐれば、みづからの健康状態に不安を感じることも無理ではない。

だが、しかし——。

病氣はあくまでも闘ひかたねばならぬ。闘病の精神は、また同時に、雄々しくも逞しい生活力と斃さねばやまぬ不壊の魂を涵養するものである。その精神なくては、正成館の千古に薫る大忠心をつぐことは出来ない——さう思つて、左近は、語氣あらく正行を諫めたのである。

正行は、頭を横にふつて、

「いや、わしが、病氣を案じたのは弱い心からではない。唯一途に、もし父上の御志を中途において挫折するやうなことがあつてはと、それだけが——」

「お黙りめされ！ それが弱い心と申すものでござる。どうしても病氣を癒すのだと、固い確信をお持ちになれば、そのやうな些細な疑惑は起らぬ筈！」

左近の眼は、らんらんと耀いてゐた。

正行が唇をかむ。その眉宇に、決意の色が濃くなつて來た。俄に床の上へ起き直ると、

「わしが間違つてゐた。憎い尊氏めを滅ぼす日は、そして、御叡慮をやすめまゐらす日はいつのことであらうかと、今日この頃の正行には、それが不安だつたのぢや！ 焦つてゐたわしの心が、いけなかつたのかな？」

「おお、さうです！ よくそこにお氣付きになりました。なにことも時節の來るまでは、ちつと耐へ忍んで、みづからを磨かねばなりませんぞ」

「わかつた！ きつと、きつとその日の來るまでは、母上やそなたの教へを守つて、武藝、學問に専心いたします。ゆるしてくれ！」

「この爺に、許してなどと、おあやまりになることはござりませぬ！」

左近の手は、いつしか正行の手をしつかりと、握りしめてゐた。

掌のあたたかみを通じて、主従の心は、主従を超えて、しつかりと結ばれ、一つに融けあつてゐた。斃すのだ！ 尊氏を、朝敵を斃して、大御心をやすめまゐらすまでは、石にかじりついても耐へ忍

ばねばならぬ。

四つの手が、固く握り交されたまま、わなわなと顫へて、左近の唇から忍び泣きの嗚咽が洩れた。

(その四)

星霜が流れて――。

今年(こゝし)はもはや、正成(まさしげ)が兵庫湊川(ひんぐろみなとがわ)において壯烈(さうりやく)きはまる戦死(せんし)をとげた延元(えんげん)元年(げんねん)から、指折(さしひ)りかぞへると十二年(じふにねん)目の正平(しょうへい)二年(にねん)、嫡男(ちやくなん)多聞(たもん)正行(しょうぎょう)は二十五歳(じふごさい)、次男(じだんじ)次郎(じらう)正時(しょうとき)は二十三歳(じふさんさい)、三男(さんなん)虎夜(こや)又正(またしょう)儀(ぎ)は二十歳(じふさい)の春(はる)を迎(むか)へた。

この間に、正行(しょうぎょう)の身(み)の上(うへ)にも、そして足利(あしかが)幕府(ばくふ)の勢力(せいりき)の上(うへ)にも、さらには世上(せじやう)の動き(うごき)の上(うへ)にも、さまざまな變化(へんか)がおとづれたことはいふまでもない。

「――身(み)は南山(なんざん)にうづむと雖(な)も、神(かみ)はつねに北關(ほくくわん)を望(のぞ)む」

おそれおほくも、おん傷(いた)はしき御辭世(ごじせ)の句(く)をのこされて、後醍醐(ごだいてんご)天皇(てんかう)は、崩御(ほうご)遊ばされたのである。延元(えんげん)四年(ごねん)十月(じゅうがつ)、御即位(ごご即位)あそばされた今上(いまじやう)陛下(てんか)〔すなはち後村(ごむら)上天皇(てんかう)〕には、いまなほ、吉野(よしの)の御行在(ごぎんざい)所(ところ)にあらせられる。

禁裏(きんり)御警衛(ごけいゑ)のために、正行(しょうぎょう)は吉野(よしの)にあつた。

そして――。幕府(ばくふ)では。

執事(しつじ)たる高師直(かうしぢく)は、思ひ昂(おぼ)つて、権力(けんりき)を恣(し)にふるつた。何(なん)といつても、強烈(きやうりやく)な、理不盡(りふじん)ではあつたが飽(あ)くまでも押し(お)しの一手(いっしゆ)の強引(かういん)な意志力(いしりき)をもつてゐたので、またおのづからその威力(ゐりき)も、時に尊氏(たかうぢ)が

直義(ちかぎ)を、しのがうとさへしたのだつた。

ここに副將軍直義(ふくしやうぜんぢかぎ)と師直(しぢく)との軋轢(あつれ)が生(な)じて來(き)た。と同時に、足利(あしかが)の外戚(ぐわいせき)上杉(かみすぎ)と高(かう)の一族(いっぞく)との對立(たいりつ)もうまれて來(き)た。

尊氏(たかうぢ)の庶子(しよし)直冬(ちかふゆ)と、嫡男(ちやくなん)義詮(ぎせん)との仲(な)も、むつまじくはなかつた。

内訌(ないごう)。内部分裂(ないぶんぶんれつ)の危機(きき)。さうした氣配(けいはい)が、幕府(ばくふ)のなかに充滿(じゅうまん)して、まさにその勢力(せいりき)は分裂(ぶんれつ)した。

(すでに機(き)は熟(じゆく)してゐる。一日(いちにち)も早く朝敵(あそてき)の首魁(しゆくわい)を誅伐(しゆはつ)すべきである)

正行(しょうぎょう)の心(こゝろ)は、はやつてゐた。

吉野(よしの)の春(はる)は、一日(いちにち)千本(せんぼん)。下(しも)の千本(せんぼん)がまづ散(ち)つて、藏王(ざうおう)權現(ごんげん)うらの中(なか)の千本(せんぼん)が、次に色褪(いろあ)せてゆく。

奥(おく)の千本(せんぼん)が、ちやうどいま七八分(しちぱんぶん)の咲(さ)き頃(ころ)であつた。

如意輪(にぎいりん)寺前(じまへ)の准后館(じゆんごうくわん)の客殿(きやくだん)には、帝王(ていおう)の傳(でん)として、「神皇正統記(じんかうせいとうき)」の著者(ちやくしや)である、ここのあるじ北畠(きたはたけ)親房(おやしむら)卿(きやう)が、大納言(おほののりごん)四條隆資(しじやうたかすけ)卿(きやう)と對座(たいざ)してゐた。

ここ兩三年(りやうさんねん)は現狀維持(げんじやうゐぢ)ち。なほ天下(てんか)の形勢(けいせい)を見てから、といふ決議(けつぎ)が下(くだ)されたのは、つい先日(せんじつ)のことであつた。

(親房(おやしむら)卿(きやう)の心(こゝろ)を動か(うご)かして、朝議(あそぎ)の再開(さいかい)を、ねがふよりほかにない)

さう決心(けつしん)した正行(しょうぎょう)は、いま、この准后館(じゆんごうくわん)を訪(たづ)ねたのである。

「正行(しょうぎょう)ひとへに、お願(ねが)ひ仕(つか)ります。希(こゝろ)はくは、廟議(ぼうぎ)の御決議(ごけつぎ)を、准后(じゆんごう)のお力(ちから)をもちまして、何卒(なんぞ)御變(ごへん)更(か)うのことに、おん取計(とりか)計(けい)らはせ賜(たま)はりませ」

正行は、深く頭を垂れた。顔には、惘然の色がありありと表れて、思ひつめた者の表情さへ泛べてゐた。

「なぜ、そのやうに、戦をせかれる？」

准后は、不審の面持で問ひ返した。

「はい——」

「いまだ現状では、全く勝味のない戦を、闘はんとするには、理由なくては叶ふまい！」

「さあ、なんと？」

正行は、はたと行詰つた。

時機の尙早は、わかりすぎるほどわかつてゐた。待てば必ず、内亂を醸すであらう朝敵足利の現状も、戦雲ひとたび動かば、かへつて團結するであらうことも、よくわかつてゐた。

それにもかかはらず、なほ戦を急ぐ氣持——。

正行は、日頃の、自分の健康に不安を感じてゐたからであつた。

（もし！ ただの一度も朝敵誅伐の戦場にのぞまずして病死せば？ なんの顔ばせあつて黄泉の父に見えられよう！ 勝算の有無ではない！ 闘へるだけ闘つて、義のため、道のために、討死しなければならぬ）

四 條 噺

(その一)

開戦の勅許は下つた。

正行は、亡父正成の十三回法要を、一年くりあげて、五月二十五日に、菩提寺觀心寺で營んだ。

正成の長男として、櫻井驛の受訓者として、正行のひたむきな心は、朝敵と戦ふことに、もつばらであつた。

父の志を實踐することが、子として父への至孝であり、臣として君への至忠であると、正行の心はひきしまつてゐた。

夏は、やがて過ぎようとした。

朝敵が吉野に來侵すべき態勢をととのへて、第一軍細川顯氏は、畷田八幡の境内に進駐した。

遼へ討つ楠勢は、虎夜叉正儀の奇襲をもつて、一千の細川軍を潰滅させた。

しかしその頃、京都へは、朝晝晩と、それも毎日のやうに、諸國の兵が集つてきた。幕府の執事、高師直の命令に因るのだつた。

高一族、その他の諸大名が、軍勢を驅り催し、全國から集つて、集結が終つたときに、一月ほど前から待機してゐた山名時氏の四千の兵が、天王寺、住吉方面への出動を命ぜられた。

時は冬、十一月も末であつた。手が届まるほどの寒い日、楠軍は七段の縦隊をもつて、山名軍に

突撃を敢行した。

戰場は瓜生野。野の霜は陽にあたつてとける前に、流れ出した血汐で、紅く彩られながら融かされた。三度くりかへした突撃に、山名の大將、時氏は、傷ついて危かつたが、辛くも遁れることが出来た。菊水の旗が、風をきつて、はためいてゐた。

時を移さず、天王寺の細川軍が、譽田の森の惨敗を雪ぐために、瓜生野からの敗残兵、赤松、佐々木隊をも糾合してゐたのを、楠軍は攻撃して、これを殆んど潰滅の状態にまで屠つた。

(その二)

師直は遂に出陣した。

極月二十四日に、弟師泰を先發させ、師直自身は、二十六日に京都を發つて、男山に陣した。あけて正平三年、正月二日。南下の大進軍が開始された。その勢五萬である。

正行は母阿久の方とともに水分館に棲んでゐた。正時は、下赤坂の城を間近にながめる新屋敷に棲んでゐた。正儀だけが、水分盆地の北の端にある東條の丘のうへに、堅固な城を築いて、楠氏兵備の中心をつくり、そこを居城としてゐた。

その東條の城を側面から衝かうとして、師泰の率ゐる二萬の大軍が遊撃軍となつた。

賊軍は、ひしひしと迫つて來た。

正行の心中いかに？

(その三)

往生院の、小書院の濡縁の柱に、もたれながら正行は、生駒山の頂きをながめてゐた。

先刻やつた手紙で、正儀が東條の城から馳せつけて來るのを、待つてゐるのだ。

正時が入つて來た。

「兄上。飯盛山の師直に動く氣配が見うけられるとの報！」

「今日動くか？」

「さあ、今日は？」

「動かば、雌雄を決するのみぢや」

「動かずば？」

「明日を待つて、こなたから挑む！」

正行は、さう言つて、眉をあげた。

正時も、颯爽とうなづいて、出て行つた。

正行は、火鉢に手をかさしながら、ふたたび生駒の峯へ目をやつた。山の背の空が、だいぶ曉めいてきた。

生駒の背後は北大和の平野だ。おなじ大和でも、吉野は南の山峽だから、ずゐぶん距離があるのだが、ふと正行にはその距離の觀念が消えて、すぐその峯のそとが吉野であるかのやうに感ぜられた。

正行は、かたじけなくも、天顔に咫尺し奉りえた有難さに、沁々と心を浸した。参内したのは十二月二十日であつた。師直の動員した兵が、京の内外に充満すると聞いて、おん暇乞ひの意で、吉野へ

赴いたのである。優渥なる勅諭を頂戴した正行は、感泣した。心ひそかに、禁裡に永訣しまゐらせてから、先帝の御陵に参拜して、素懐をとぐべき日も近いことを、冥々に申述べた。それから藏王堂に詣つて、過去帖に、俱に戦死すべき宗徒の人々の姓名を、自分と正時の名の下に書きつらねさせた。返らじとかねて思へばあづさ弓

なき数に在る名をぞとどむる

その時、詠んだ歌をも書きとめた。親房卿とは、すでに和泉の和田の城へ出むかれたあとなので、逢へずになりましたが、四條卿とは膝を交へて、さまざま協議した。——正行は今、さうした吉野の一日を、思ひ返してゐるのだつた。

さらに、思ひ出は、糸をたぐるやうに、つぎつぎと泛びあがつて来た。

恩地左近翁をはじめとして、古い人々は次々に世を逝つた。しかし、人は替り、世は變つても、父正成の植ゑ残した精神は、根を張り枝を伸ばして、不滅の光を楠家一族の中に放つてゐる。

半年前とは見違へるほど血色のよくなつた正行の双頬に、朝の眩い光が映じてゐた。潑刺として眼が耀く。

(その四)

(だめだ！ とても兄の決心を、覺悟を、ひるがへすことは不可能だ！)

正儀は、兄の顔を見た瞬間に、すぐさう感じた。

じつは、ここから退陣を——もとより一身一家のためならず、ひとへに至尊皇室のおんために、諸

國勤王義軍のために、長久の計を策せんとして——一時の退陣をすすめる意で来たのであつた。が、しかし。

かうして近々と對座して見て、兄の心にもはや二念あるべからざることを悟つた。

「兄者びと！」

「正儀！」

兄弟は、ちつと、互の目を見合つた。

「兄者の魂は、いまや赫耀と大きな光明に照り映えてゐる。お心は、滾々と湧き出づる大きな歡喜にひたつてゐる。虎夜叉、もはや阻みませぬ。御本懐を、とげられませ！」

「おお、その言葉！ 正行は心嬉しく聞くぞよ！」

「師直を討つか、討たるるか、二つに一つを——闘はれよ！」

「闘ふ！」

正行は、しみじみとした口調で、言葉をつづけた。

「虎夜叉——。わしは、病苦のために、一時は随分あせつた。十二年の間、あらゆる努力を傾けて来た朝敵討伐が、もしや病ひゆゑに挫折しはせぬかと、それを思ふと血も凍り、眼も心も昏むかと覺えたのだ。が、倅ひにも、病魔は次第にわが身から遠ざかりゆくいま、この賊の大軍をむかへ撃つことの出来るのは、さても何といふ仕合せであらうか。のう、正儀！ わしは決して病の牀に斃るのを怖れて、死をいそぐのではない。正行は、病弱ゆゑでなく、聖くして毅き信念のために、なほ長らふ

べくもある身を、みづから求めて殺すのだ。尊皇すなはち至善の道を、ひたすら歩まんがために、返らじと、かねて思ふことが出来たのだ。虎夜叉、わかってくれるか？ 喜んでくれるか？」

「おお、喜びます。——兄上のために深く、衷心より喜びますぞ！」

「わしの喜びはそれに過ぎない。おぬしといふ弟を持つたので、後顧の憂へも殆んどなしに、萬死の戦線へ、突進できるのだ。吉野の行宮におはします、大君への、御警衛——宮居を護り奉るべき重き任務をも、安んじて、おことに委ねつつ、正行は死に得ること——それが喜びしいのだ！」

正儀は、深く首をうなだれて、正行の一語々々を、胸に疊みこむやうに、聴いてみた。

「のう正儀。かならずお許は、正行亡き後、正行が生きてあらうよりも遙かに良く、敵を禦ぎもし、また撃破つても行くであらう。正行はおことを厚く、固く信頼する。それゆゑに、おそれおほいことながら、帝のおんためには、現世的にも、この正行は死ぬる方がよいのぢや」

「兄者びと！」

正儀は、複雑な情操がこもこも去來する眼ざして、兄の面を見入りながら、

「兄者は、ひたむきに、父上のお志を追はせらるる。楠の嫡男として、いかにも華々しい死方、すなはち生き方を擇ばれた。それがしとていまはただ、兄上よ、天晴れ永遠の生に不朽なるべき、尊皇精神に生きたまへ、と申しあげるのみでござります。こたびの合戦にて、もし精兵二千を失はば、それだけ吉野の防衛は困難をますでござりませう。なれどその曉に、不可侵の地に御動座を仰ぎ、正儀、不敗の地歩に立たば、その時こそ菊水の旗を京都に進めて、足利を追落し、一天萬乗のみかどを、大

内裏におん迎へまゐらせませう。おお、そのことこそ、正儀が畢生一期の大事業、ありとあらゆる心血をそそぐべき大奉仕でござる。しおほせねばやみ難き責務でござる」

と、熾烈な誠心が、眉宇に上つて、躍動した。

「お、虎夜叉！」

末弟が、心に抱く理想を、正行ははじめて聞くことが出来たのだ。決して意外ではない。まさに、さうあるべしと期待してゐたことだつたが、今、力強く、明かに表白された言葉は、なんと正行の心を軽くし、さわやかにし、感動せしめたであらう！

（あゝ、自分は、心おきなく、死んで行ける！）

正行は、深い信頼の念に打たれた。

「さらば、兄者びと！ 行かれよ！」

「さらば、弟！ 残つてくれ！」

死して大義をのべんとする者と、生きて大忠をいたさんとする者とが、互ひに昂ぶつた感情の搏動する手と、手を、かたく把つて——ちいつと、眼を視諦め合つた。

涙が、ふたりの睫毛にかがやいた。

「正儀！ 母上に、三人分の孝養を頼んだぞよ！」

と、正行が云つた。

「次郎兄とも、ここで、兄上の前で、訣別いたしたうござる。お呼びください」

と、虎夜叉が請うた。

(その五)

河内街道は、高野街道と、およそ一里の間隔で併行してゐた。そして恩智川と寝屋川とが、その兩街道のまん中に、やはり道と併行しつつ流れてゐた。

高野街道と川の間、高の大軍の右翼十隊、一萬五千の兵が充滿してゐた。また高野街道と國境山脈の間は、左翼十隊、おなじく一萬五千人で埋まつてゐた。

だから、師直の麾下一萬の本陣を衝かんがためには、この左右兩翼二十陣を撃破しなければならぬ。のみならず、ほかに山手に備へた佐々木道譽の一萬の軍勢とも戦つて、これを破らないかぎり近づけない。それは、二千の楠兵が、いかに勇猛でも、至難なわざだつた。

そこで。

楠勢は、河内街道を迂回して、高軍右翼の側面を、半里の距離で、まつしぐらに駆け抜けて、ただちに師直の本陣をつくべく、行動を開始した。五日の未明であつた。

(野々宮の森を奪はねばならぬつ！)

正行は、自身劍をぬいて、じつに多くの敵を斬つた。

(これならば、師直は、討てる！)

師直の、倚せかかり輪違ひの旗までは、もはや五六町であつた。

悽愴、鬼神も哭す突貫が、敢行された。

肉を斬らせて、骨を斬りつゝ、敵帥の本陣へ、殺到したのだ。そして正行みづから、師直の首を斬り落した。

「おお！」

決死死闘の楠主従は、朱に染まりながらも歡呼した。

それだけに——落膽もまた大きかつた。

師直の首！と思ひきや、それは身代りの、上山修理亮高元の首であつたのだ。

「無念ッ！」

弟の正時が、齒ぎしりかんで口惜しがつた。だが、正行は、

「もう哮ぶのを罷めい」と、制した。

ここは四條の、窪い噉だつた。

見渡せば——四圍はすべて敵兵の重圍だつた。

びゆーん、びゆーんと、矢が集中されて来る。ふせぐべき物蔭ひとつない正行主従四十人。

はや、黄昏近かつた。

どんなに刀をふるつたとて、防げるやうな矢ではない。幾萬本か數知れぬ矢攻めが間斷なく。——

「弟！もう最期だ！」

「兄上！三十餘合、闘ひぬいた。ただ遺憾は、師直を逸したことですッ！」

「否。遺憾はないぞ！」

正行は、血と泥に染まつた非理法權天の差物を仰ぎながら、しづかにいつた。

「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は權に勝たず、權は天に勝たず」

枯草の地べたに、落矢の上に、どつと胡坐した。

「弟！ 刺し違へて死なう！」

(その六)

「うむ、四條噉て——。次郎兄と刺違へて、——湊川さながらの御最期か」

暗然と、虎夜叉正儀は、

「さぞかし、御本望！」

と、つぶやいた。そして、目をつぶつた。

險の下から、洩れた泪の幾粒か、朝の光に、きらりと、輝いた。

正平三年正月六日、早朝の、東條の城であつた。

（噫！ 兄上は理想を追はれて、戦死の道をひたすら擇ばれたのだ。兄正行は、父上に倣つて、尊皇の精神を、永く後世に布かんがために、身を殺された！ この虎夜叉は、あくまでも、生き残つて現世にあつて、今日が日において、盡忠報國の實を、はげみ挙げねばならないのだ！）

正儀の心は、高く、強く、大きく浪打つて昂つてゐた。

その使命、その責務。重ければ重いだけに、身のひきしまるおもひであつた。

肉を駈り、魂を躍らして、身内から滾々と、熱いものが湧き出て來た。

昨日の午後から黄昏へかけての、激戦の模様を逐一、聴いた正儀は、

「香月」

と、後ろにひかへてゐる香月權太を呼んだ。

「水分の館へ參つて、兄上御陣歿の顛末を、母者人にお告げ申せ！」

(その七)

後室阿久の方は、權太からの一伍一什の報告に耳傾けてゐた。

側に侍してゐた人々も、首うなだれ、眼をしばたいて、暗然とした。ツンと、涙をすすする音も、人々の間から洩れてゐる。

阿久の方は、最後に一つ大きく頷くと、端座したまま、早春の陽がさして明るい高窓の方に、眼をうつして、ぢつとそこに視線をとめた。

正成逝いてより十三年、てしほにかけて育てあげた三人の男兒。その二人、正行と正時が、父の遺訓をうけついで、大君のおんため、君國のため、散華したのである。

師直の大軍は、程遠からぬ野々宮の森から、正行軍を殲滅した餘勢を驅つて、一氣に東條に迫るかも知れない。危機は身邊に切迫してゐた。

それにもかかはらず、後室の心には、なにかほつとしたやうな、落着きが湧き上つて、おもはず、につこりと微笑さへうかんだ。

(亡き夫、正成どのも、さぞ黄泉で御満悦であらせられるであらう。わたしも、これで心残りか——)
肩の重荷がおりたやうな、重責をなしとげたあとのやうな、心の軽さを錯覚したのだ。
「お——」

だが忽ち、嘆息が、阿久の方の唇をついて、洩れた。
俄に、居ずまひを正すと、はるか吉野の方に向きなほつて、行宮を遙拜した。
權太をはじめ一同も、これにならつて、宮居の方を伏し拜んだ。
阿久の方は、愕然としたのである。

(お、君への御奉公、尊皇の道に、濟んだとか濟まぬとかいふ限りはない筈ぢや!)
それを、たとへ一瞬でも、ほつとしたやうな氣が、湧き起つた自分自身が、しみじみと愧づかしかつた。

(東條には、まだ末子正儀がある!)

御宸襟をやすめまゐらすまでは、斃れても斃れても、なほ罷むべきでない。命あるかぎりには、亡夫正成の精神を繼いで、一天萬乗の大君の御ため、日の本のために、我が子を捧げなければならぬ。いや子のみではない。孫ができたならその孫も、その曾孫も、血統のあらんかぎりには、捧げつくさねばならない。

それが、夫から遺託された妻の至善のみちであり、母としての至上のつとめである——。
虎夜叉の母として、さらに生きぬかねばならぬ、雄々しくも毅然たる日本の母の覺悟が、阿久の方

の胸のうちに、勃然として湧きあがつた。

(命あるかぎり。みそなはせ給へ!)

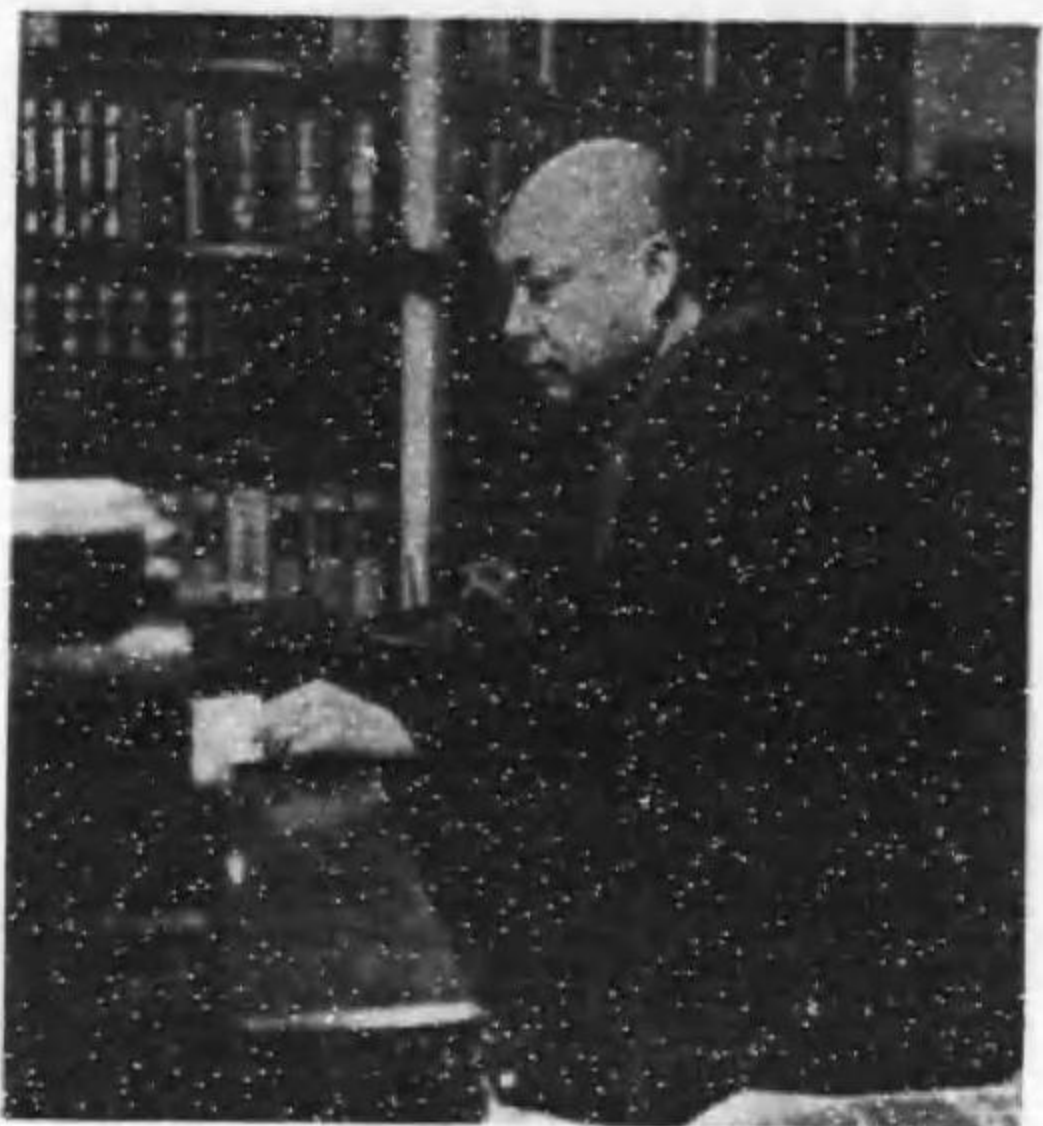
後室は、心の中で、亡夫正成の靈に合掌した。
行く手は遠い! 母の道はまだ峻峻である。

悲しみの心は、つゆほどもなかつた。いやなかつたのではない。あらゆる悲しみ、あらゆる歎きを乗り越えて、「母の務」のきびしい自覺が、後室の眸に、かなしみの泪の露を宿さなかつたのである。

わが子のために——。
大君の御ために——。

夫正成の精神を、この世に生かし遺すために——。
生きぬかねばならない。
(ああ! あまりにも嚴肅な母の務!)

(完)



鷺尾雨工氏略歴

新潟縣西蒲原郡黒埼村黒鳥の住人、鷺尾理衷の弟、鷺尾玄張の曾孫に生る。本名、浩、幼

時、父の死と倒産に遭ひ、母の生家、同縣北魚沼郡小千谷町近郊山谷、中野家に寄寓し、小千谷中學に學ぶ。大正四年、早大英文科卒業後、種々なる職業に携はりて悉く失敗、四十四歳にして初めて作農生活を營み、雨工と號し、吉野朝太平記」「大楠公」「織田信長」「霸者交代」「劔豪物語」「伊達政宗」「若き家康」「北畠親房」「菊池決戦」「戰國麗女傳」「東海片割月」「姫」「國難に克つ」「合戦川中島」「武家大名懐勸定」「新編太平記」「續新編太平記」「英雄時宗」その他を著作し、現在、東京市淀橋區諏訪町六二に定住し、昭和十八年五十二歳を算す。

昭和十八年二月二十五日印刷
昭和十八年三月一日發行

非賣品

編輯兼
發行人 西田季雅

印刷所(西京七) 内外出版印刷株式會社
代表者 須磨勘兵衛
京都市中京區河原町御池

發行所 京都市役所

終

